
真恋姫無双～若獅子演義～

語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真恋姫無双〜若獅子演義〜

【Nコード】

N2791N

【作者名】

語り部

【あらすじ】

安楽七年、若獅子と呼ばれた少年は寡兵を持って大軍に挑み、そして破れた。

だが、次に目覚めたのはまるで見覚えのない未知の世界だった。そこで出会った少女と、そしてこれから出会う女性たち。

大乱の世に現れた若き獅子の物語、はじまりははじまり〜

*本小説はアンチ劉備です。劉備好きの方は見ない方がいいかもしれません。

序章（前書き）

無謀にも三つ目の小説を投稿してしまった。とりあえず亀更新で頑張ります。

ところで銀河戦国群雄伝ライって知ってる人いるのかな？

序章

元魔三年………神聖銀河帝国皇帝・光輝帝の崩御により十三代二百七十年に渡る帝政は終わりを告げた。

そして帝国の崩壊により全宇宙は混乱の中にあつた………戦乱の世の到来である。

帝国の衰退によつてもたらされた各地の群雄たちの抗争………それは世に二人の風雲児を生み出した。

一人は元帝国左将軍であり北天の軍閥・比紀弾正^{ひきだんじょう}。

彼は力を失った帝国になり替わり瞬く間に北天を制圧……各地の群雄は次々に彼の傘下に入りその軍事力を持って全銀河を統一しようとしていた。

そしてもう一人の風雲児は奇しくも弾正の率いる軍の中にいた。

第八海兵団突撃中隊所属・竜我雷^{りゅうがらい}。若くして類い稀なる武勇を誇り、弾正の北天統一の戦において敵総大将を一騎打ちで討ちとった。

この後、竜我は弾正の築いた五丈国の四天王の一人である女將軍・狼刃^{ろっぴは}にその才を見込まれ一兵卒から精鋭たちの師団率いる師団長に

任命される。

そして弾正はいまだ自分に服従しない南天諸国へと侵略を開始した。

弾正率いる千八百万の大軍の先鋒は師団長に抜擢されたばかりの竜我雷であった。この戦で彼は南天最大の実力者、智の女将・独眼竜正宗。そして後に天下の覇権をかけて争う若き練国国主・羅候らうと戦い、敵味方の名を知らぬものなしとまでに称えられるようになる。

弾正の南征は正宗の知略によって頓挫し、弾正が軍の立て直しを図る一方で智の独眼竜正宗は南天に存在する他の4国の内、明を滅ぼし、猛国、趙国を併呑。練国を傘下に収め南天支配を確実のものにしていった。

五丈国の南征から二年後、五丈に衝撃が走る。英雄・比紀弾正の死である。弾正の死後、竜我は南天との戦の最前線・南京楼の太守に就任し、五丈国首都・武王都を離れる。

竜我の南京楼赴任後、五丈国をさらなる混乱が包んだ。弾正の娘であり、後の竜我第二夫人・麗羅姫れいらひめを抱き込んだ元五丈四天王の一人・骸羅がいらによる五丈乗っ取りである。

これと時と同じくして南天の正宗が北伐を開始。五丈に攻め寄るも骸羅と結託した練の羅候の謀反によって頓挫し、正宗は失脚。正宗に変わり羅候が南天の最大の実力者となる。

それからしばらくして遂に骸羅は麗羅姫を裏切り、銀河帝国皇帝を僭称する。これを予見していた竜我は着々と軍備を進めておりすぐに偽帝・骸羅討伐の軍を起こす。

精鋭八百万を擁する骸羅軍に対し竜我の軍は十万。圧倒的な数の差がありながらも竜我軍は個々の兵の強さに加え銀河一の名軍師・大^だ覚^{いかく}屋^{やしん}師^{しん}真^まの巧みな用兵によってこれを撃破し、竜我は五丈王・竜王を称す。

これによって天下は北天の竜我、南天の羅候に二分される形となった。この竜我と羅候の対立した数年間は後に竜虎の時代と呼ばれるようになる。

安康九年。長き戦いの末、羅候を討ち破り全銀河を統一したのは竜我であった。彼はそれから三年の後、銀河皇帝に即位する………と、ここまで長々解説したがこの物語の主人公は竜我でもなければ羅候でもない。

この物語の主人公は戦乱の世においてあまりにも生まれるのが遅すぎたと呼ばれた一人の少年である。

第一幕 若獅子奮迅

安康七年……五丈と同盟関係にあった西羌国が反旗を翻し、五丈首都・斉王都に迫った。

五丈王・竜我雷は南征に出陣しており、実質五丈は虚を突かれた形となる。

そして国境に迫る西羌軍。だがその西羌を足止めするものがいた。五丈と西羌の国境近くに存在する五丈傘下の小国・閃国である。

閃軍は五丈国境の兵たち、そして五丈本国から援軍としてきた大將軍・孟閣もうかくと連携し、全兵力を持って西羌軍を迎え撃った。

しかし閃、五丈本国からの援軍に国境の守備兵を足しても寡兵には変わりなく、また、將の数も不足していた。

五丈側の主だった將は五丈の大將軍・孟閣。そして閃国の若き国主にして若獅子と称される僅か十三歳の獅王皇牙しおいういがであった。

この獅王皇牙こそ、この物語の主人公である。

皇牙と孟閣は寡兵ながらも懸命に戦った。大軍の西羌に対して数の

少ない五丈軍は機動力を優先し、奇襲しては離脱する戦法をとり、西羌軍を攪乱した。

しかしそれでも数の差に圧され、孟閣は乗艦に被弾し、敗北を余儀なくされる。これにより孟閣は五丈本国に撤退。王宮にて西羌軍と戦い、壮絶な最期を遂げることになる。

一方の皇牙は孟閣撤退の殿を務め、その皇牙の旗艦は満身創痕の状態で西羌軍に包囲されていた。

「ここまでか……」

「孟閣殿は無事に脱出なされたが……我らはそうは行かぬか」

「燃料と弾薬は？」

「もう弾薬は底を尽いておる。燃料も最大船足で進めばすぐに尽きるだろう」

「若君、どうなさいますか？」

旗艦の艦橋では主だった将が今後を話し合っている。しかし現状打てる手は三つ……西羌に降伏するか……自害するか……それとも……将たちはその決断を艦橋の窓から宇宙を見上げる一人の少年に問いかけた。

腰ぐらいまでの美しく燃えるような長い炎髪をポニーテールにし、同じく燃えるように赤く輝く灼眼。一目では女性にも見える、鎧の上に陣羽織を着たいまだに幼さの残る少年。

彼こそが弱冠十三歳で閃国の国主となった若獅子・獅王皇牙である。

「決まっている。最後まで、戦うのみだ」

皇牙はそう言うと腰に差した刀に手を置く。皇牙の腰の左右に一本ずつ、計二本の刀は皇牙が父から受け継いだ名刀。今まで折れるどころか刃こぼれもしたことがない太刀である。

「艦内の全將兵に伝える！我らはこれより最後の突撃をかける！命の惜しいものは今の内に退艦しろとな！」

皇牙の命令に将たちは笑顔を浮かべた。

「若君、この艦に命が惜しいものなどいませぬ。皆、若君と運命を共にする覚悟でございます！」

「そうでなければこのような勝ち目のない戦に出てはきませぬ」

「っ!?!…………お前たち……………」

将たちの言葉に皇牙は涙を流す。その皇牙に対する忠義は本物であった。皇牙は涙を拭くとすぐに艦の外に目を向け、艦内放送で艦中の全ての将兵に伝えた。

「よし、我らはこれより敵旗艦に突撃する！全速前進！目標はただ一つ、西羌軍総大将・秦宮括しんていかつの首だ！」

「……………おおおおおおおおお……………!……………!……………!……………」

「

艦内の将兵たちは闘志漲る雄叫びを響かせ、死地へと向かうのだっ
た。

「宮括様！」

「何事だ！？」

それからしばらくして、色黒の鎧姿の男、秦宮括のところに兵士が駆け込んできた。

「て、敵旗艦がまっすぐ突進してきます！」

「な、なんだと！？すぐに撃墜しろ！」

秦宮括はすぐに指示を出す但那は間に合わない。なぜなら、すでに皇牙の艦は砲撃を受けながらも目と鼻の先にまで近づいてきていたのだ。

「だめです！間に合いません！」

そして秦宮括の艦はすさまじい衝撃を受けた。

砲撃を受けながらも皇牙の艦はまっすぐ秦宮括の旗艦に向かっていった。

「若君！敵の砲撃です！」

「構うな！どの道こちらには弾薬も燃料もない！このまま突っ込むぞ！」

そう言ってる間に皇牙の艦と秦宮括の艦の距離はどんどん近付いていく。

「喰らいつけ！！！」

皇牙の怒号と共に艦は秦宮括の旗艦の横っ腹に突っ込んだ。

「よし！全員抜刀隊に参加しろ！狙うは秦宮括の首だけだ！」

号令と共に皇牙を戦闘にした全ての将兵たちが敵艦になだれ込んで

いく。

「どけ！」

皇牙は両手に持った太刀を巧みに操り、次々に敵兵を斬り伏せて行く。首を斬り取り、槍ごと斬り裂き、若獅子の名に恥じめ獅子奮迅の活躍を持って先に進んでいく。

「若君！」

「佐竹！？」

すると佐竹と呼ばれた将が皇牙の前に立った。その直後、前方から大量の矢が浴びせられる。皇牙の前に立った佐竹は針鼠のように身体じゅうに矢が刺さり、仰向けに倒れた。

「はあ！！！」

倒れる佐竹の背後から飛び出した皇牙は矢を放った直後の弓兵を瞬く間に屠った。本来なら皇牙は矢をくらいなどしないが場所が悪い。この場所は艦内の狭い通路。避けることができる場所などなく、それをわかっていたからこそ佐竹は皇牙の身代わりになったのだ。

「佐竹……」

皇牙は佐竹の方を振り向く。佐竹は笑顔で横たわっていた。

「若君…お行きください……倒すべき敵はまだその先にいるのですから……」

「っ!?!?.....すまない!」

佐竹の言葉に僅かに涙を流した皇牙は駆け出した。残された佐竹はこれまでを思い出しながらゆっくりとまぶたを閉じ始める。

「（主を護って死ぬるならば本望.....だが.....できることなら.....若君が天をとる姿をこの目で見たかった.....天よ.....なぜ.....若君をこんなにも遅く.....この世に生まれさせたのか?若君ならば.....: 竜我殿にも.....羅候にも劣らぬ才が.....天下人の器があると言っのに.....）」

そうして佐竹は息を引き取った。彼のこの願いがこの後、少々違う形で叶うなど.....誰も想像できなかった。

「どこだ！秦宮括！」

一方、皇牙は秦宮括を探して艦の中を捜しまわっていた。その姿は
返り血と、そして自身が流した血にまみれていた。
頭からも出血し、満身創痍であることが一目でわかる。それも当然。
彼はここまで数千はいようかという敵兵の全てを斬り伏せてきたの
だ。

皇牙に付き従ってきた将たちも皆力尽き、皇牙は一人になっていた。

「っ！？そこにいたか！」

そしてついに皇牙は秦宮括を見つけ出した。

「秦宮括！」

皇牙は怒声を上げながら秦宮括を睨みつける。

「秦宮括……なぜだ！なぜ竜王に……竜我殿に刃を向けた！？よう
やく世が泰平に向かい始めたこの時に！」

秦宮括を問い詰める皇牙。一方の秦宮括は何も答ええない。

「宮括様！お急ぎ脱出を！皇牙殿は我らが食い止めます！」

秦宮括の部下たちが皇牙の前に立ちふさがる。秦宮括はそれを見ると戦艦を脱出するために皇牙に背を向けた。

「っ！？逃げるか秦宮括！」

皇牙は秦宮括を追おうとするが西羌の兵に阻まれた。

「ぐっ！」

傷を押して戦う皇牙だが出血によって意識が朦朧となり、次々に傷を負っていく。

そして遂に皇牙は片膝をついた。

「ここまでか……聞こえるか秦宮括よ！此度の戦は俺の負けだ！だが、貴様もまた滅ぶ運命だ！貴様程度に竜我殿は越えられぬ！」

皇牙はそれだけ大声で叫ぶとその場に倒れ伏した。

それから数分後、皇牙の乗り込んだ秦宮括の艦は大爆発を起こした。この後、秦宮括は一度は五丈首都・斉王都を占拠するも、恐るべき速さで南天より帰還した竜我に討たれることとなる。

そして……………そこはまた別の世界にて……………

ある村の近くの森の中で血だらけで横たわっている皇牙が一人の少女によって発見された。

時は西暦二世紀末……………若き獅子の名が大陸に響き渡るのはまもなくのことであった。

第二幕 若獅子、新たな世界へ

「じ……じは？」

皇牙が目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。どこかの家の中だろうか？そう考えるが答えは出てこない。

戦艦の中で戦い、そして倒れたはずの皇牙にはなぜこの場所にいるのかが分からなかった。

「ぐー！……痛ッ……」

起き上がるうとする皇牙が自分の身体をみると大量の包帯が巻かれていた。

「（艦がどこかの星に流れ着いたのか？……いや、あの艦の状況ではいつ爆発してもおかしくはなかった。では……）」

「あ、気がついたんですね！」

皇牙が物思いにふけっていると一人の少女が入ってきた。明るい緑いろの髪で皇牙よりも少々年下に見える。

「……君は……？」

「私は典偉といます。あなたは……えっと……」

典偉が困ったような顔になる。そう言えば自己紹介していなかったな。と、皇牙は思い出した。

「俺の名は獅王皇牙だ」

「皇牙さんは村の近くの森に倒れていたんですよ」

「（森……だと？）」

ここで皇牙の疑問はさらに深まっていく。艦が爆発せずにごこの星に不時着したとしても森の中にいたというのはおかしい。疑問に思う皇牙はさらに典偉に質問した。

「ここから五丈まではどのくらいある？」

皇牙の質問に典偉は疑問符を浮かべる。

「『じょう』ってなんですか？」

「は？」

それを聞いた皇牙は自分の耳を疑った。五丈は銀河でもおそらく最も天下に近い大国家だ。いくら辺境でも五丈の名くらい知っている。

「では、練はわかるか？」

藁にもすがる思いで皇牙は質問するが典偉からは知らないとの言葉が返ってきた。

五丈も、そしてその五丈に唯一対抗できる練も知らない。皇牙は若干パニックになっていた。

皇牙はその後も典偉に色々なことを聞いたがその全てが自分の知らないことばかりだった。

まずこの国は漢という名であること。現在は帝も力を失い世が乱れ始めていること。

そう言ったことを聞いているうちに皇牙はここが自分のいた世界で

はないのではないか？という結論に達した。

決定的だったのはこの世界には戦艦。つまりは星から星に移動する技術がないこと。

結局同じだったのはこの世界もまた戦乱の世になるだろうことだけだった。

自分がこの世界の人間でないと典偉に伝えたときは大変だった。

「で、では皇牙さんは『若き獅子』なのですか!？」

そう言って慌て始める典偉をなだめた皇牙は事情を聞いた。

どうもこの大陸にいる管路という占い師がそのような占いを言ったという。その占いとは……

『遠き地より傷ついた若き獅子現れしとき、混沌に満ちたこの世を救うである』』

大概の人間は出鱈目だと思っているようだが今の乱れた世ではそう言ったものにすぎらうとする者も多く、大陸中にこの噂が行き届いているらしい。

「そうだな……おそらくそれは俺のことだろう。俺のいた世界でも若獅子なんて呼ばれてたからな」

皇牙の言葉にさらに興奮する典偉。結局再びなだめるのに数十分かかった皇牙だった。

「では、皇牙さんは行くところがないんですね？」

「まあ、そうなるな」

落ち着いた典偉にそう聞かれ、皇牙は頷く。全く他の世界から来た皇牙に行くあてなどあるうはずもない。

「じゃあここで暮らしませんか？」

「は？いや、だけど……こんな得体の知れない奴を置いていて大丈夫か？」

皇牙は典偉の申し出にそう返すが典偉は断固として譲らない。

「大丈夫です！皇牙さんは悪い人に見えませんが、それに、私一人暮らしますので……」

典偉の顔が暗くなる。皇牙は悪いと思いつつも問いかけた。

「……………両親は？」

「母は私を産んですぐに……………父は大分前に病で……………姉妹同然の子がいたんですけど、最近、陳留の都に行ってしまった……………」

「（ああ……そうか。この子は俺と似てるんだ……）」

皇牙は自分と典偉を重ね合わせる。皇牙も産まれてすぐに母を亡くし、その後、父も骸羅による五丈乗っ取りの動乱で失っている。

それでも自分には支えてくれる家臣や何度か会いに来てくれた狼刃。それに竜我がいた。

「わかった。しばらく厄介になるよ」

皇牙がそう言うと典偉は満面の笑顔になった。

「じゃ、じゃあ皇牙さんに私の真名をお預けします」

「真名？」

皇牙は再び出てきた知らない単語に首をかしげる。

「あ、真名と言うのはその人が本当に心を許した相手にしか呼ばせてはいけないもので許可なく呼んでしまうと問答無用で斬られても文句は言えないんです」

「……そんな大事なものを俺に許していいのか？」

皇牙の問いかけに典偉は笑顔でうなずいた。

「はい！私の真名は流琉ナオといます！」

こうして皇牙と流琉の同居生活が始まった。

主人公設定

名前：獅王しおう 皇牙こうが

年齢：十三

性別：男

容姿：イメージは灼眼のシャナのシャナを少し身長を伸ばした姿。髪型はポニーテールで炎髪灼眼。その容姿からよく女に間違えられる。

服装：白い鎧の上に黒い陣羽織をはおっている。両腰に一本ずつ太刀を差している。

詳細：小国・閃の若き国主。若いながらに智勇に秀で、若獅子と呼ばれる。竜我雷、狼刃など、数多の英雄に出会い、その背中を見続けた。けてきた。

幼いころに父母を亡くし、家臣に支えられて成長。十二で正式に家督を継ぐ。

正式に家督を継ぐ前から時勢を読んで竜我の傘下に入り、西羌との国境付近の自国で有事に備えていたところに西羌が反乱を起こし、激突。秦宮括の目前まで迫るもそれまでの出血がひどく意識を失い、次に目覚めると見知らぬ土地にいた。

戦い方は二本の太刀を使った二刀流を得意とし、また弓矢も使えるなど多芸に秀でる。

知識においても優秀でまさに才色兼備の将。だが時として年相応の姿を見せる。

不義を許すことができない性格。そのためか時として無茶な策をと

ることもある。

ちなみに閃にいた頃は民と触れ合う為に良くお忍びで城下を訪れていた。

第三幕 再会の時、智謀の士（前書き）

今回は銀河戦国群雄伝ライからあるキャラクターが登場です。個人的にかなり好きなキャラです。

後何人か出す予定です。オリキャラも出ますけど。

あとあとがきに銀河戦国群雄伝ライのキャラクター列伝を作りました。一回目は主人公の雷ではなく今回登場した人物です。もし良ければ読んで見てください。

第三幕 再会の時、智謀の士

〔SIDE: KOUGA〕

俺がこの世界に来てから数日。鍛錬できるまでに回復した俺は流琉に村を案内してもらっている。

「兄様、こつちですよ！」

俺の前を流琉が笑顔で歩く。ちなみに『兄様』とは俺のこと。流琉は一人っ子で兄弟に憧れていたらしい。しばらく一緒にいるうちに俺のことを兄と慕うようになっていた。

この世界は俺のいた世界と星と星を移動できないって点以外はそれほど変わらなかった。強いて言えば火薬を使った武器、銃や大砲がないことだが……別にそんなに気にしない。

あと驚いたのは流琉だ。巨大なヨーヨーを振り回し、並みの武将よりも遥かに強い。どこかの国に仕官しても十分やっていけるだろう。

「おやおや、典偉ちゃん。そのお姉さんはどちらさんだい？」

果物屋の女性が流琉に声をかける。………っというか、お姉さん？ まあ、間違えられても仕方ないかな？今の俺は縛っていた髪を下ろし、流琉の家で借りたゆつたりした着物を着ている。自分の顔が女顔なのはわかってる。だから間違えられてもたいして気にしない。

「おばさん、兄様は男性です………よね？」

流琉が女性の間違いを指摘する……だが自信なさそうに俺を見た。

「男だよ。っていつか流琉は俺の手当てしたんじゃないのか？」

俺が呆れながらそう言つと流琉は恥ずかしそうにしている。

「いえ……その……兄様の傷の手当ては骸延様にしていたたいたの
で……」

「あらそう、骸延様がねえ。それにしてもごめんなさいね。女の人
と間違えちゃつて」

女性が俺に謝り、流琉と談笑してるが俺はそれどころではなかった。

骸延殿？

その名を聞いた俺は固まった。俺はその名前に聞き覚えがあった。

骸延殿……幼い頃に何度か会つたことがある。

竜我殿が五丈王となる前、弾正公亡き後に五丈を乗つ取つた元五丈

四天王の骸羅の弟であり、知恵袋で智勇兼備の将でもある。

俺の父とは旧知の仲で骸羅が五丈を乗っ取る前からときどき閃を訪れていた。

父が骸羅の五丈乗っ取りの動乱で死んだ後も何かと俺を気にしてくれた。ある意味では俺の仇でもあり、そして恩人でもある人だ。

ただ、骸延殿は竜我殿が骸羅討伐の軍を上げたとき、竜我殿の軍師・師真殿の反間の計で骸羅は骸延殿を幽閉した。

その後、骸延殿は部下たちの訴えで復帰したが説きすでに遅く、骸羅は討たれ骸延殿は竜我殿に捕らえられた。

捕らえられた骸延殿は竜我殿に才を買われ、臣従するよう呼びかけられたがあくまで骸羅への忠義を貫き斬首されたと聞いた。

本来なら亡くなった筈だが……………俺がこの世界に来たように骸延殿も来ているとしたら……………

「流琉、その骸延というのはどんな人なんだ？」

俺は流琉に訊ねる。もしも骸延殿なら……

「えつとですね、何でも昔に大怪我をしたとかで顔に布を巻いてるので素顔はわかんないんですけど……頭が良くてとても強いんですよ」

文武に長けている……顔を隠してる理由は恐らくこの世界では俺の世界の南蛮の血を引く者がいないと考えれば合点がいく。

「流琉、案内してくれないか？」

俺はとにかく、その骸延殿に会いに行くことにした。

～SIDE END～

〈SIDE:GAIEN〉

私がこの世界に来てから数年が経った。竜我に斬首され、死んだはずの私は気が付いたらこの世界にいた。驚いたことに私は斬首されたときよりも十年ほど若返っていた。

この世界に来た私は各地を回り、多数の情報を得た。この世界では私のような獣面の輩はおらず、必然的に布を巻いて顔を隠すようになった。

そして私は顔を隠し、大陸中を旅した。死んだはずの私がかここにいるのだ。もしかしたら兄上たちもこの世界にいるのではないかと。

しかしそれは淡い希望だった。どこを探しても兄上たちの存在は確認できなかった。

それから私はこの村に住み着いた。最初こそ村人は私を警戒していたが無頼者を撃退したり医者 of 真似事をするうちに信頼を勝ち取った。

今の世は混沌としている……もはや漢王朝に力はなく、いずれは私がいた世界のように群雄割拠の時代が来るだろう。

私もこの世界で自分の力がどれだけ通じるか試したいと思う。

だが、私には仕えたいと思う主がない。陳留の曹操や江東の孫堅は傑物であろうが……やはり私は仕えたいとは思わない。

前に言った二人はすでに家臣も多く、その名も有名だ。

故に、私はもつと別の……もつと前の段階から主を支えたい。これといつていまだ勢力を持たぬ……それでいて兄上や竜我、独眼竜に劣らぬ器を持つもの……

そんな主に天下を獲らせることができたなら……私はあの男を、竜我を一太守から一国の王にまで導いた大覚屋師真に勝てるかも知れぬ。

ふう……いつもの下らぬ妄想だ。異なる世界で天下を獲つたとて、あの男に勝てるとは限らぬ。なにより、そんな都合よく私の求める主がいるとは限らぬのに……

「骸延様、いらつしやいますか？」

む？この声は流琉か？そう言えば数日前に流琉が助けたあの少年は
大丈夫であろうか？命に別状はなかったが……

それにしてもあの少年、どこかで見たことがあるような顔だったが
……私の気のせいか？

とりあえず流琉を招き入れるか。

「うむ、いるぞ。入ってきなさい」

「失礼します。さあ、兄様」

すると流琉と一緒に数日前の少年がいた。ふむ、大丈夫のようだな。

「はは、よく来たな。何もないところだが、まあ座りなさい。君も
傷は大丈夫のようだな」

私がそう言うと二人は私と対面して並んで座った。しかしこの少年、
やはりどこかで？以前旅をした国で出会ったのか？

そんなことを考えていると少年の口からは驚きの言葉が出た。

「大五丈国丞相・骸延殿でよろしいですか？」

な！？

「い、いったいどこでそれを……………」

誤魔化そうとも思ったが……………恐らく意味はあるまい。あの燃えるような灼眼には確信の色が見て取れる。

しかしいったいどこで……………待てよ？あの灼眼……………それにそれと同じような色の炎髪……………まさか！？

「お久しぶりです。閃国の先代国主・獅王天牙の子、獅王皇牙です」

この日、運命は動き出した。彼らが天下に名を轟かせるのは、もう
しばらく先の話……………

第三幕 再会の時、智謀の士（後書き）

銀河戦国群雄伝ライ キャラクター列伝その一

名前：骸延

性別：男性

詳細：銀河戦国群雄伝ライの登場キャラクター。

五丈国四天王・骸羅がいらを長兄とする三兄弟の末弟で南蛮の民の血を引く茶色い毛をした虎の顔の獣面の男。

長兄・骸羅、次兄・骸山がいざんに比べて智謀に長け、骸羅の五丈乗っ取りを助けた。

智謀の士だが二人の兄に及ばないまでも武勇においても並みの兵士を大きく凌駕する。

その智謀を持つて練国国主・羅候と軍事同盟を締結。当時銀河でも最大級の実力者である智国の独眼竜正宗を失脚させる。

骸羅が帝位に就くと丞相となり兄を支える。しかし骸羅が皇帝を僭称したことで兼ねてより危惧していた南京楼なんけいろう太守・竜我雷が反乱を起す。

竜我の快進撃に骸羅軍は次々に打ち破られ、兄の骸山も竜我との一騎打ちで討ち取られる。

さらに竜我軍軍師・大覚屋師真による反間の計によって謀反の疑いが掛けられ、さらにはその尋問の中で妻と子を骸羅に殺される。

その後、さらに旗色の悪くなる骸羅軍の中で骸延のかつての部下が骸延に掛けられた謀反の疑いを晴らすことに成功するが妻子を殺された骸延はすでに正気を失っていた。

そして竜我軍が骸羅軍の本拠地・斉王都を攻めた際の砲撃の余波で正気を取り戻し、大五丈復興のための計略を胸に動き出す。

しかしときすでに遅く、斉王都は竜我軍に占拠され、兄・骸羅も討ち死にして竜我軍に捕らえられる。

その才を高く買った竜我に仕官を持ちかけられるが自分は最後まで大五丈の丞相として名を惜しみ、また竜我の元にはすでに師真がいて自分の居場所はないことを理由に恭順を拒絶、斬首された。

骸羅が五丈を乗っ取りだしたときから骸羅と同じ五丈四天王の狼刃、そして竜我雷を警戒していた。そのため独断で両名を亡き者にしようとしていた。

独眼竜正宗を失脚させた際は練の羅候と正宗を挟撃し、返す刀で羅候を討つて天下統一を果たそうとしたが狼刃によって阻まれた。

兄である骸羅は狼刃を盲目的に信じすぎてしまい、天下統一の絶好の機会を逃すことになる。また、骸羅は竜我也舐めていたために追い込まれることとなった。

二人の兄に比べ思慮深く、人を見る目もあることから二人の兄を差し置いて師真に大五丈の注意すべき人物は狼刃と骸延だけだと言わしめた。

兄の骸羅は粗暴であり、五丈を乗っ取ると暴政の限りを尽くしたが骸延はそのようなことはなく、妻や部下からは慕われており、子供思いの一面もあった。

第四幕 心に秘めた野心（前書き）

今回は早くアップできました。相変わらず駄文ですが……

ちょっとテンポが速いかもれません。

そして……私は流琉が好きだ！ロリコンでも何でも好きに言うがいい！！

すみません、取り乱しました。あとがきのキャラクター列伝もよろしく願います。

感想お待ちします。

第四幕 心に秘めた野心

互いに向き合う皇牙と骸延。骸延は皇牙の名を聞いて目を丸くしている。

骸延が皇牙に最後に会ったのは皇牙が西羌と戦う七年前、竜我が拳兵する数ヶ月前なのでまだ六歳であった。

さすがにそれだけの年月が経っていれば顔もわからなくなるだろう。

「そうか……皇牙であったか……随分と大きくなった」

懐かしそうに顔に巻かれた布の向こうで目を細める骸延。一方の皇牙も照れくさそうに笑う。

だが、二人の話についていけない存在がいた。

「（え？え？だいごじょう？丞相？）」

皇牙の横に座る流琉である。流琉は大五丈という初めて聞く単語に困惑し、さらに丞相という国の中でも最高位の地位がさらにその困惑を強めていた。

「えっと、兄様。どういうことですか？」

意を決して皇牙に訊ねる流琉。皇牙は骸延に許しを貰うと流琉に簡単に骸延が自分の世界の人間であり、かつて大五丈という大国の丞相であったことを話した。

「じゃ、じゃあ骸延様も天の国の方なんですか！？」

「天の国？……ああ、最近噂の占いか。では若獅子というのはもしや皇牙のことか？」

当初疑問符を浮かべる骸延だったが占いのことを思い出して納得した。

「……おそらく……向こうでも若獅子と呼ばれていましたから」

それを聞いた骸延は腕を組んで考え込んだ。

「（皇牙……幼い頃より才に溢れていると思ったが……予想以上に大きく育ったようだ。……皇牙ならば……）」

「骸延殿？」

考え込む骸延に皇牙が声をかける。すると骸延は言葉を紡いだ。

「皇牙。今の大陸の情勢は理解していよう？これをどう見る？」

骸延の言葉を聞いて皇牙も真剣な顔になって答える。

「今はまだ漢王朝が健在ですがそう遠くないうちに群雄割拠の戦国時代が来ると考えています」

皇牙の言葉に骸延は頷く。皇牙はこの大陸のことを流琉に彼女がわかる限りのことを聞き、そう言う結論に達していた。

「では皇牙よ。世が戦乱の時代となったらお前はどつする？このまま平穩に暮らすか？それとも……」

骸延は探るように皇牙に問いかける。皇牙も骸延の言わんとすることを理解し、それに答える。

「世が乱れたらと言わず、傷が癒えたらこの村を出ようと思います」

「え!？」

皇牙の言葉に流琉が驚きの声を上げる。一方の骸延はただ無言で皇牙を見据える。

「兄様……出て行ってしまおうのですか？」

流琉が悲しそうな顔で皇牙を見上げる。皇牙はその流琉の顔に心苦しくなりながらも言葉を続ける。

「この世界に来て、俺はずっと考えていました。自分には何ができるのか……なにがしたいのか……そして、気付いたんです。俺自身の中にある想いに。

かつて、竜我殿がそうしたように……俺も天下に名乗りを上げたい……そして……俺が天下を統一したいと……」

それは皇牙の中にずっと燻っていた野望だった。ずっと抱いていた天下獲りへの野心。しかし元いた世界では竜我雷と言う英雄の存在がその野心に歯止めを掛けていた。

しかしこの世界には竜我は居らず、乱世の最中に生まれ、家督を継いだのが乱世の終盤と言うことはない。なぜならこの世界の戦国時代はこれから訪れるのだから。

そんな状況に皇牙の天下獲りへの野望は燃え上がっていた。

「それで、お主はどうするつもりだ？この村を出たとしても、どこかの軍に入って出世を待つわけにもいかぬだろう？」

「この村を出て、少しづつ義勇軍を募ろうと思います。そして手柄を立て、どこかの県令なり太守なりになろうと思います」

骸延の言葉に堂々と答える皇牙。しかし骸延は苦い顔をする。

「（確かにすぐにも天下に名乗りを上げるにはそれが一番早い……だが……）」

皇牙の言葉に穴があることを見抜いた骸延はすぐに皇牙に問いかける。

「だがそれには時間がかかるぞ？そもそも手柄を立てる前に漢王朝が倒ればそれで終わりだ。ならば義勇軍を持ってどこぞの県令か太守を討った方が良くはないか？」

骸延は皇牙を試すように問いかける。それに対して皇牙は迷わずに答える。

「ですが義勇軍では訓練を積んだ正規兵に勝てるようにするのに時間がかかります。義勇兵を集めるのは今話題の『若獅子』の名を使えばある程度集まるでしょう。それに……」

「む？」

「ここに来る途中で商人が各地で黄色い布を頭に巻いた賊が暴れ始めていると聞きました。今はまだ小さいですが、いずれこれは大陸

を揺るがす大乱になると俺は読んでいます」

「ほう……ではその大乱で手柄を上げ、領地を得ると?」

「賊相手ならばある程度訓練を積ませ、策を実行できるようにすれば十分に勝ち目があると俺は踏んでいます」

皇牙の考えに骸延は腕を組んで感心する。

「(この世界に着て僅か数日でここまで時勢を読むか……予想よりも大きく育ったようだな)」

しばらくすると骸延は再び口を開いた。

「確かにここ最近、黄色い布を頭に巻いた賊は出没している。もっとも、大半の諸侯はそれほど大事になるとは思っていない。だが、私もお主と同じくこれは大乱に繋がると思っている」

「骸延殿……」

「さすがだ、皇牙。これならば我が心のうちも存分に明かすことができる」

骸延はそう言うと顔の布をとり始めた。

「骸延殿!？」

それを見た皇牙は慌てる。骸延が顔を隠す理由を知っているからこそ、流琉がいるこの場で顔をさらすことに驚いたのだ。

「構わん。お主の想いを聞き、我が心を明かすに覆面など不要だ。流琉よ、できるならこのことは誰にも言わないでくれると助かる」

「え？」

皇牙の慌てようと骸延の言葉に流琉は呆気にとられる。そして骸延の覆面が外されると流琉は驚愕に目を丸くする。

「骸延……様？」

そこには黒茶の毛に覆われた虎の顔があった。

「ふふ、これが私の顔だ。私の世界に住む南蛮の民はこうして獣の顔を持つものが多い。恐いか？」

骸延の言葉を流琉は慌てて否定する。

「い、いえ！そんなことはありません！どんなお顔だろうと骸延様はお優しいお方です！」

流琉の言葉に骸延は苦笑いすると皇牙に向き直る。

「さて、皇牙よ。お主は天下を獲ると言ったな？」

「はい」

「ならば、軍師が必要とは思わんか？」

「……………え？」

皇牙は骸延の言葉に呆気に取られた。

「私もな、この世界で己の才を試したいと思った。だが、生憎と仕えたいと思える人物がいなかった……今日まではな」

「骸延殿？」

「皇牙、私を軍師として迎え入れてはくれんか？私は今話して、お主に私の才を託したくなつた」

「骸延殿が……俺の軍師に？」

「うむ。お前は今はまだ及ばぬが、いずれ竜我にも並ぶほどの才があると私は見ている。もつとも、無理にとは言わんが……」

骸延がそう言いかけたとき、皇牙はすでに頭を下げていた。

「若輩者ゆえ、至らぬところもありますが……よろしくお願いします！」

「……………迷わぬのだな？」

骸延は少々予想外だった。骸延はかつて皇帝を僭称し、悪政を敷いた骸羅の知恵袋だった。そのことを知っている皇牙は渋るかと思っていた。

「過去の経歴に興味はありません。優れた才を持つものを拒む理由はありません」

こうして皇牙と骸延は君臣の間柄となった。

そして骸延の家からの帰り道。皇牙と流琉は二人並んで歩いていた。二人の間に会話はなく、流琉は暗い表情をしている。

「兄様は……いつか出て行ってしまっんですね」

流琉は兄と慕う皇牙が傷が癒えたら村を出て行くことを悲しく思っていた。

「……………」

皇牙は流琉に掛ける言葉が見つからない。流琉があの家で一人暮らししていると言つのにそれを知つて出て行くつもりだか
ら。

「でも、いいんです。それが兄様の望みなんですから……」

そう悲しげに語る流琉。結局その後、二人の間に会話はなかった。

さらにそれから数日後、ついに皇牙と骸延の旅立ちの日になった。皇牙はこの世界に来たときと同じ鎧を着てその上に陣羽織を羽織っている。

「ではお世話になりました」

皇牙は見送りに来ている村の人々に礼を言う。その後、皇牙が旅立つことが村に知れ、村の人たちが西羌との戦でボロボロになった皇牙の陣羽織や鎧の修復に力を貸してくれたのだ。

「いいんだよ。あたし達もアンタには世話になったんだから」

以前あった食べ物屋の女将が皇牙に言う。実際皇牙は怪我が完治するまでいろいろと手伝いをし、村の人たちから慕われるようになったからこそここまでしてもらえたのだ。

「流琉は来ていないようだな。まあ、無理からぬことか」

骸延が流琉がいないことに気がつく。皇牙は少々寂しそうな顔をする。

「仕方がないでしょう。両親のいない流琉にとっては別れは何よりも辛いでしょうから。ではこれで……」

「元気で頑張るんだよ」

皇牙が村人たちに頭を下げ、村に背を向ける。すると……

「兄様！待ってください！」

「流琉？」

聞こえてきた流琉の声に振り向く。するとそこには荷物を背負って走ってくる流琉の姿が見えた。

「はあ……はあ……ま、間に合いましたあ」

流琉が肩で息をする。

「る、流琉？いったいどうしたんだ？」

「兄様、私もお供させてください！」

「はあ！？」

普段冷静な皇牙が素っ頓狂な声を上げる。

「ずっと悩んでたんですけど……決めました！私も兄様の大望をお手伝いしたいです！お願いします！」

「しかしだな……」

「よいではないか」

戸惑う皇牙に骸延が声をかける。

「流琉の武勇はお前も知っていよう？それにこのままでは勝手に着いて来そうだぞ？」

骸延の言葉に流琉は頷く。どうやら絶対に付いてくる気のようなのだ。

「はあ、しょうがないな。これからよろしくな？」

皇牙が流琉の頭を撫でる。すると流琉は少々顔を赤くして気持ち良さそうに目を細めた。

「はい！」

「はははは、これは嫁探しの必要もないかも知れんな」

「骸延殿!?!」

「あう……… / / /」

冷やかす骸延に皇牙は驚き、流琉は顔を赤くする。

後の世に名を残す三人の物語はここから始まった。

第四幕 心に秘めた野心（後書き）

銀河戦国群雄伝ライ キャラクター列伝その二

名前：竜我りゅうが 雷らい

性別：男

詳細：銀河戦国群雄伝ライの主人公。

当初は比紀弾正を国主とする五丈国の一平卒だった。だが弾正の御前での大乱闘によって五丈四天王の狼刃に才を見込まれ、重機甲師団の師団長に大抜擢される。

その後すぐに起こった弾正による南征の先鋒を勤め、当時の南天最大の実力者・独眼竜正宗、後の宿敵・練国国主羅候と戦い、敵味方にその名を知られるようになる。

弾正の死後、上層部の謀略によって南天との戦の最前線・南京楼なんけいろうの太守に任命される。その頃、五丈本国では骸羅が五丈乗っ取りに動き出していた。

南京楼の太守となった竜我はそこで商人・大覚屋の長男にして後の大軍師・大覚屋師真に出会う。軍師を得た竜我は質・量共に軍備の増強を図り時を待つ。

そして骸羅が帝位に就き、皇帝を僭称するとすぐさま竜我は偽帝討伐の軍を起こし、大五丈国本国へ向け、快進撃を続ける。

次々に骸羅軍を破る竜我の前に恩師・狼刃が立ちはだかる。竜我は涙を流しながら狼刃を打ち破った。

三百万対十万の兵力差を覆した竜我は大五丈首都・斉王都を占拠。

新生五丈の王に即位し、竜王を号す。

その後、五丈の西に位置する西羌国と同盟を締結し、四天王の最後の一人、玄偉の謀略を打ち破った竜我は国内の体制を固めることに尽力する。

そんな中、南天の群雄、智の独眼竜正宗と南天王・羅候が大軍を率いてほぼ同時に五丈に押し寄せる。

だが軍師・師真の策により正宗を打ち破った竜我は返す刀で南天軍を撃退し、撤退させることに成功する。

正宗死後、智に言葉巧みに接近、智領に軍勢を派遣し、有名無実となった智王（正宗の弟。正宗は女性なので王位を継げなかった）に自殺を強要し、智を併呑した。

その後、弾正を始めとする歴代北天の盟主が成し得なかった南征に本格的に着手し、ついには南天の首都を占拠する。

しかしそんな最中に西羌が同盟を破棄して五丈に侵攻。その戦いの中で本国に残っていた大將軍・孟閣が戦死、さらには本国に攻め込まれた際に負傷した竜我の正室・紫紋を失う。

急遽、たった一隻の戦艦で電撃的に帰還した竜我は本国を奪還。西羌王・秦宮括を斬首し、西羌を滅ぼす。

再び南征に臨む竜我だが南天の大都督・姜子昌きょうししやうの首を持参したかつての正宗腹心の部下・飛竜に毒を塗った短刀で刺されてしまう。

瀕死の重傷を負い、生死の境を彷徨う竜我だが銀河一の医者・扶華ふかによって命を救われる。

傷を癒した竜我は最終決戦で羅候を討ち取り、ついに全銀河を統一。その三年後に銀河皇帝に即位した。

一平卒の頃から類稀な武勇を誇り、師団長になってからは軍略も磨き、また騒ぎを起こすことに出世するなどの悪運の強さも兼ね備える。

部下の助言を大事にし、多くの部下に慕われる魅力も併せ持つ。

信念や義理によって敵対するもの、味方になるものには寛容だが反面、日和見主義者や職業意識で仕える相手を変える人間を毛嫌いす

る。

欠点としては一度懐に入れたものには考えが甘くなることで、同盟を結んだ秦宮括を信じるあまり西羌軍の反乱を許してしまった。

一平卒の頃は感情で動くことが多かったが師団長、そして王になるに連れて犠牲を少なくするために冷酷な判断もできるようになり、銀河統一の障害となった師真の弟の英真を誅殺している。

酒好きで女好き、自身の後宮には三百人の女を侍らせているが男性としての愛情は四人の夫人と梨扇という愛人に注がれている。

実は皇帝即位から十数年後にかつて超常現象（自身が竜となって一人の女の元に飛んでいくという現象）によって智の独眼竜正宗との間に子供を作っていたことが発覚する。この息子は他の息子たちに比べ若い頃の竜我にそっくりである。

本小説主人公の皇牙とは骸羅討伐後に知り合い、まるで兄弟のような関係で竜我は若くして才に溢れる皇牙を可愛がっていた。もつとも、皇牙自身が望んだために皇牙は故郷の小国・閃の国主に納まった。

第五幕 若獅子、麒麟児を得る（前書き）

ようやく更新できました。

ちなみに骸延は普段は顔に布を巻いて顔を隠しています。外すのは皇牙や流琉と一緒に居る時ぐらいです。

そして今回、三国志のオリキャラ登場です。

ちよつとテンポ早くて不自然かも……自分の文才のなさが恨めしい……

第五幕 若獅子、麒麟児を得る

村を出てから数週間。皇牙と流琉、骸延は荊州に入っていた。ここまでの村々で三人は山賊退治をしながら旅をし、その結果若獅子の名前はそれなりに広がり始めていた。

もともと義勇軍はまだできていない。理由としては今まで立ち寄った村は小さい村ばかりで義勇軍を募ったりしたら働き手がいなくなる可能性がある様な村ばかりだったからだ。

しかしその間にも黄色い布を頭に巻いた黄巾賊と呼ばれる者たちが次第に巨大になり始めていた。そして荊州でもその脅威は広まりつつあった。

「最近、黄巾賊の噂を良く聞くようになりましたね」

「うむ、恐らく朝廷もそろそろ動くだろう。我らも急がねば機を失う」

「ですが義勇軍を募るにもここはまだ荊州の外れ。金もない我らには兵も雇えない」

上から順に流琉、骸延、皇牙である。三人は歩きながら今後を話し合っていた。

「む？」

「骸延殿？」

何か気付いた骸延が立ち止まる。骸延はそのまま近くの崖まで歩いていく。

「見てみる」

骸延の言葉に皇牙と流琉も崖の下を見る。そこでは黄色い布を巻いた軍勢と他の軍勢が戦っていた。

「黄巾賊!？」

「噂をすれば影・・・か」

その光景を見て皇牙と骸延は分析する。黄巾賊は数が約五百、それと戦う軍勢は約三百。兵の練度が互いにそれほど変わらないことから黄巾と戦っているのは正規軍ではないだろう。

兵を率いているものは黄巾賊では確認できる限りで三人。それに対して恐らく義勇軍であろう部隊は一人。兵の数、将の数を見ても黄巾の方が上である。問題は将の質だが・・・

「骸延殿。あの将、どう見る?」

皇牙の視線は義勇軍を率いている将に向く。義勇軍を率いているのは黒い短い髪に動きやすそうな軽鎧、体格は小柄で顔立ちも幼い少女。恐らく歳は皇牙と同じか皇牙と流琉の間ぐらいだろう。

ちなみに皇牙は骸延に対してある程度タメ口になっていた。これは骸延に言われたことで君主が家臣に敬語を使うなどのことだ。

「ふむ、才はあるかもしれんがまだ発展途上と言ったところだな」

「で、結局どうするんですか？」

流琉が疑問を口にす。見てみると義勇軍は次第に圧されている。将の少女が槍で応戦しているが明らかに旗色が悪い。

「助けに行つたほうが良いだろう。如何に数が多くても横から突けば混乱する。その間に義勇軍を撤退させるなり何なりできるだろう」

骸延の言葉に皇牙と流琉が頷くと崖を駆け下り、黄巾賊に向かっていった。

〔SIDE……? ? ?〕

最近各地を騒がせている黄巾賊。それによつて多くの人たちが苦しんでいる。それに我慢できなかった私は義勇軍を結成して故郷を出た。少しでも多くの人を助けたかったから。

でも所詮理想と現実は違う。故郷を出た私たちは荊州で暴れている黄巾賊と戦っていた。それは私が戦ったことのある黄巾賊とは明らかに強さが違った。

私たちの故郷では黄巾賊は少なく、将も強くなかった。けど、今回ののは違う。数も私たちよりも多くて強い将が三人いる。私は何とか踏ん張ってるけど、みんなはもうボロボロだ。

「はあ……はあ……みんな、退いて！」

目の前の黄巾賊はまだ多い。何とか撤退して体勢を立て直さないと……撤退の指示を出したけど黄巾賊は追い縋つて来て次々に討たれていく。

「くっ!?!」

ここまで……なの?

「うわあああああああああ!?!?!」

私が諦めかけたそのとき、絶叫が響き渡った。私たちがじゃない……

黄巾賊の方から聞こえてきた。私は敵を倒しながら悲鳴の上がったほうを見る。そこには……………

「ぬん！」

黄巾賊を剣で切り裂き、さらには投げ飛ばしている覆面で顔を隠した人と……………

「やああああああ！！」

巨大なヨーヨーを振り回して黄巾賊を蹴散らす女の子、そして……………

「ふっ！」

見たことのない形の双剣で次々に敵を屠っていく炎髪灼眼の……………男の子？が暴れていた。その子は性別がどっちかわかんない。だって凄く綺麗なんだもん。

「ば、化け物だあ！」

いきなり現れて暴れまわる三人に黄巾賊は混乱し、次々に逃げていく。勝ちを確信してたから予想外のことに対応できてないんだ。

そう考えてる間にも三人は混乱する黄巾賊を蹴散らしていく。何人か向かっていくけどすぐに討ち取られる。そしてそれを見て他の黄巾賊が逃げていく。

「……………」

すると一瞬だけ男の子？と目が合う。男の子？はすぐに私に背を向

けて敵の中に走っていく。

「みんな！いまだよ！押し返して！」

気が付いたら私はみんなに指示を出していた。あの男の子？の背中が、まるで『着いて来い』って言ってるみたいだった。

～SIDE END～

当初苦戦していた義勇軍。だがそれは皇牙たちの加入で戦況は一変した。皇牙たち三人が横から黄巾賊に攻め込んだのだ。急に現れた三人に次々に仲間が討たれ、黄巾賊は混乱していた。

勝利を確信していた黄巾賊にとってみれば予想外すぎる出来事である。正規軍ではなく、烏合の衆でしかない黄巾賊の大半は混乱から怖じ気づき、逃げ出す、逆に義勇軍が勢いづいていた。

「お、おいテメエら！逃げないで戦え！」

黄巾賊を指揮している将たちはなんとか兵を纏めようとするがうまくいかず、次々に兵が逃げ出していく。さらには先程まで逃げ腰だった義勇軍が盛り返している。

「ぎゃあああああああ！！」

すると黄巾賊の将の前に皇牙が兵を斬り裂き、現れた。

「な、なんだよ！？何なんだよテメエは！？！」

「俺の名は獅王皇牙。いずれ天下を制す男だ！」

ブン！ザシュ！

「が……あ……」

その言葉と同時に皇牙は将を槍ごと両断した。

「敵将！獅王皇牙が討ちとつた！」

皇牙が声を上げると黄巾賊は尻尾を巻いて逃げ始めた。ちなみに残りの二人の将は骸延と流琉がそれぞれ討ちとつていた。

戦闘終了後、皇牙たちのもとに義勇軍を率いていた少女がやってきた。少女は三人の前に来ると深々と頭を下げる。

「ご助力ありがとうございます！おかげで助かりました！」

頭を下げる少女に皇牙は笑顔で答える。

「気にするな。俺たちも黄巾賊を放つてはおけないからな」

「ッ！？／＼／＼／＼」

皇牙の笑顔に少女の顔が赤くなる。それを見た流琉は少々不機嫌そうになった。

「ん？顔が赤いが……風邪か？」

皇牙が少女の額に手を当てる。すると少女の顔はさらに赤くなった。

「別に熱はないか……痛ッ！？」

皇牙の脇腹に痛みが走る。皇牙が脇腹をみると流琉が脇腹をつねっていた。

「流琉、なにをする？」

「知りません！」

不機嫌そうにそっぽを向く流琉。ちなみに皇牙は幼い頃から国の為に武芸や知略を磨く毎日を送っていたのでこういうことに結構疎い。そんな二人を骸延は微笑ましく見ていた。

「あの……名前を窺ってもよろしいですか？」

まだ少し顔が赤い少女が皇牙たちに訊ねる。

「俺の名は獅王皇牙だ。こっちは俺の仲間の……」

「骸延だ」

「典偉です」

皇牙に促され骸延と流琉も名を名乗る。すると少女は慌てふためく。

「し、獅王皇牙というと最近噂の占いにある……」

「結構有名なんだな？」

不思議そうにする皇牙だが骸延は当然という顔をしていた。

「当たり前だろう？結構噂を広めてきたからな」

そう、実はここまで骸延と流琉は行く先々の村で占いにある天から現れた若獅子・獅王皇牙のことを広めていたのだ。主に商人を相手に。

その結果、大陸各地を巡る商人たちが噂を広めていったのだ。

また、他にも三人が山賊退治などをして名を広めていることも名が広がるのに拍車をかけていた。

「あ！？申し遅れました！私は姓は姜きょう、名は維い、字は伯約はくやくと申します！」

緊張しながら自己紹介をする姜維。その名を聞いて骸延は手を叩く。

「姜維……もしやお主が『天水の麒麟児』か？」

「『天水の麒麟児』?」

骸延の言葉に皇牙が疑問符を浮かべる。

「うむ、以前旅をしていた時に天水に聡明な幼子がいると聞いたことがあるのだ」

「きよ、恐縮です!」

頭を下げ、照れる姜維。そんな姜維に皇牙が訊ねる。

「ということは天水からここまで出てきたのか?」

最近、大陸の地理を頭に入れた皇牙は天水が荊州から結構距離があるため、聞く。

「はい。天水でも黄巾賊が暴れていて、私たちは義勇軍を結成して立ち向かいました。そのあと、私たちはある目的を果たすために村を出たんです」

「目的?」

「一つは私たちの村と同じように黄巾賊に苦しめられる人たを助けること。そしてもう一つはいずれ訪れる乱世を治めることのできる主を得ることです」

その言葉に骸延が覆面の奥でニヤリと笑う。

「ほう、主……か……」

「はい。私だけではなくこの義勇軍もそうした志を持つものが集まっているのです」

姜維は自分の後ろにいる義勇軍の仲間たちを見て答える。

「ならば姜維よ。ここにいる皇牙に仕えて見ぬか？」

「え？」

骸延の言葉に姜維が疑問の言葉を上げ、骸延の声が聞こえていた義勇軍の者たちも皇牙を見る。

「皇牙はまだ歳若いが天を狙うことのできる器と私は見ている。皇牙の武勇は先ほど見たとおり、智においても優れている。そして天より降り立った若獅子の風評もある。どうだ？」

骸延がそう言うと姜維は皇牙を真っ向から見つめる。

「皇牙さん、あなたの目指す世はなんですか？」

姜維の言葉に皇牙は一瞬目を閉じ、そして再び目を開け、答えた。

「俺が望むは天下泰平の世だ。大陸の民に安寧を与えたい……そして次の時代の子供たちが戦乱を知らないですむようにしたい……それが俺の願い。その為に必要なら俺はどんな犠牲も払おう。その犠牲の先に泰平の世があるならば」

まっすぐに姜維を見つめ返す皇牙。それを見た姜維は義勇軍の面々を見て頷き合つと皇牙に跪く。それに続いて義勇軍の者たちも臣下

の礼をとる。

「皇牙さん……いえ、皇牙様。我ら義勇軍、心命をとって貴方様にお仕えします。私の真名は蘭らんと申します」

「……ありがとう」

姜維の言葉に笑顔で礼を言う皇牙。こうして皇牙は数こそ少ないが自らの手勢を手に入れた。

「ふむ、となるとまずやることは兵の訓練だな。先程の動きを見たがまだ賊と同程度の練度だ。ここからの訓練で随分変わるだろう」

骸延の言葉に蘭は顔を赤くする。

「申し訳ありません……まだ未熟者故、訓練はうまくできなくて……」

「責めてはおらぬ。そう言うことも含め、俺が教えていこう」

「は、はい！よろしくお願いします！」

この後、蘭含む義勇軍が骸延に扱かれ泣きを見ることになる。骸延の訓練は厳しく、当初三百近くいた義勇軍は二百まで減ってしまった。おそらく義勇軍の中にいた一部覚悟ができていなかった者たちであろう。

しかし残った二百の兵は骸延の扱きを耐え抜き、ゆくゆくは獅王軍の精鋭として活躍することになる。

余談だがこの少し後、蘭は骸延を師匠と呼び慕うようになるのだ
た。

第五幕 若獅子、麒麟児を得る（後書き）

キャラクター列伝その三

名前：大覚屋だいがくや 師真ししん

性別：男

詳細：銀河戦国群雄伝ライの登場人物。

南京楼の豪商・大覚屋の長男で竜我軍軍師。女好き、酒好きの放蕩息子で連日色町に出入りし、酒と女漬けの日々を送っていた。

竜我が南京楼の太守となった後、ひょんなことから竜我と知り合い、竜我の将棋の相手となる。

自身の才を知りながらも仕官の話は持ちかけず、将棋の相手をしてくれればいいという竜我に興味を抱き、後に軍師に迎えられる。

素行には大いに問題があるが史書、経書、兵法、天文、医学に精通した稀代の大天才。多くの名将が彼を召し抱えようと躍起になっていた。

竜我の偽帝（骸羅）討伐でその才を遺憾なく発揮し、初戦では数十万の大軍を要塞ごと焼き尽くすと言う策を披露し、骸羅軍を恐怖させた。

その後は次々に策を用いて竜我を補佐し、竜我を天下人にした。数度敗戦はあったものの竜我軍の壊滅を防ぎ、決定的な敗北は存在しない。

利用できるものは利用する性格で、必要とあらば肉親の情すら利用する。

しかし実の弟・英真が自身の策を妨害し、五丈の天下統一を妨害してしまったことにより英真を排除しなければならなくなったときは苦悩していた。

また、竜我が飛竜の手によって危篤状態になったときには自身の身体を犠牲にしても竜我を治療してもらおうとする熱い面も持つ。

竜我の銀河統一後、丞相として力を振るうが丞相府が廃止されたのを機に隠居する。竜我とは君臣を越えた親友であり、隠居後も将棋の相手をしている。

第六幕 若獅子、虎と出会う（前書き）

今回は原作キャラと新しいオリキャラが出ます。

テンポ早くて駄文ですがよろしくお願いします。

第六幕 若獅子、虎と出会う

荊州の襄陽近郊……そこでは皇牙率いる義勇軍と黄巾賊が戦っていた。

「今だ！全軍突撃！」

骸延の号令によって義勇軍が突撃する。その先頭は皇牙でその傍らには流琉もいる。総大将が先頭に立つなど危険だが皇牙たちの義勇軍は人数が少ないので仕方がない。

「はあ！でやあああああ！」

そうしている間にも皇牙は両手の刀を振るって黄巾賊を切り裂いていく。骸延と蘭は弓兵を指揮しながら近づく敵を討ち取っていく。

義勇軍の数は二百、一方の黄巾賊は五百近く。しかし義勇軍は骸延の知略と皇牙や流琉の武勇で黄巾賊を圧倒していた。

「お、おいお前ら！逃げんな！」

義勇軍の勢いに次々に逃げ出す部下たちに慌てる黄巾の将。しかしその前に皇牙が現れた。

「貴様が大将か！その首、この獅王皇牙がもらおう！」

そう言って皇牙は駆け出し、その将を討ち取った。

「皇牙、少し良いか？」

黄巾賊との戦の後、骸延は皇牙のもとを訪れていた。

「先ほど手にした情報だが、官軍が荊州の黄巾賊を掃討する為に黄巾賊の本隊に攻撃を仕掛けるそうだ。周辺の軍も集結している」

骸延の言葉に皇牙が反応する。

「遂にか……で、官軍の将は確か……」

「官軍の総大将は涼州の董卓、それに江東の孫堅が主立った将だな。我らはそれに合流し、功を得る」

「だが、問題は俺たちが功を立てる場を得られるかだが……」

「問題はあるまい。我が軍の名はこれまでの戦で知れ渡っている。それに敵の数は多い……味方は多いに越したことはないだろう」

「よし、明日から官軍に合流するために移動を開始する。皆にもそのように伝えてくれ」

皇牙がそう言うと骸延は「うむ」と返事をして兵たちの下にむかった。それを見送った皇牙は星空を見上げる。

「いよいよ天下への第一歩。この戦で功を立てられるかどうか……それによって決まる」

しずかに……そして力強く拳を握り締めた。

それから数日、皇牙は義勇軍を引き連れ官軍が集結している場所に向かっていた。

皇牙は馬に乗り、義勇軍二百を引き連れて歩いている。

その姿は装備こそ貧弱でその大半が戦場で打ち破った黄巾賊から拾い集めたものだがそれを除けばその行軍は立派で装備がしっかりしてれば官軍にも見えるものだ。

これらは骸延の厳しい訓練の賜物であり、その結果、当初三百人いた義勇軍は二百人まで減ったがその代わり、兵たちの質は上がった。

兵が逃げ出すほどの厳しい訓練に蘭は兵が減るのを良く思っていないがそこは骸延が説き伏せた。

骸延曰く『必要なのは千の弱兵よりも百の強兵だ。たとえどれだけ数が多くとも弱兵では意味はなく、数が少なくなるとも覚悟を抱く強兵ならば勝利を得ることができる』ということだ。

これは骸延の過去の経験からの言葉だった。かつて骸延が属した大五丈は三百万の大軍を擁しながら僅か十万の竜我軍に敗れた。

それは率いるものが優秀だったこともあるが竜我軍の兵の質の高さ、それに対し大五丈は強引な徴兵で集められた兵だったために練度は低かった。

もちろん大五丈が油断していたこともある。しかし相手は烏合の衆である黄巾の賊徒。そんなものたち相手ならば攻城戦でもない限り骸延には二百の兵でも勝てる自信があつたのだ。

そうこうしてゐるうちに義勇軍の目前に官軍が駐屯していると思われる陣が見えてきた。

「兄様、着いたみたいですね」

皇牙の懐から流琉が声を出す。何故懐かと言つと、流琉は皇牙に抱きかかえられるような形で馬に乗っている。理由は簡単、義勇軍には馬が三頭しかないのだ。

そして皇牙と骸延は言わずもがな、蘭も故郷を出てから馬に乗って来たのでそれなりに乗りなれているのだが、流琉はほとんど馬に乗つたことがなかつたのだ。

その結果、馬が三頭しかいないことと相まって、流琉は皇牙に抱きかかえられる形で馬に乗っていた。

ちなみにそれが決まつたとき、流琉は嬉しそうに顔を真っ赤にし、蘭は妬ましそうに流琉を見ていた。

「ちよい待ちい。あんたら何者や？」

皇牙たちが陣に向かうと入り口にさらしを巻き、偃月刀を持った関西弁を喋る女性が立っていた。それを見た皇牙は流琉を抱いて馬から下りると流琉を離し、女性に頭を下げる。

「俺の名は獅王皇牙、義勇軍二百を引き連れ馳せ参じました。どうか董卓殿にお取次ぎいただきたいのですが」

「おお、あんたが噂の若獅子か！ええで、ちよい待ちいや」

そう言うと女性は陣の奥へと入っていった。それからしばらくすると女性が戻ってくる。

「着いてきいや。案内したるで」

女性の言葉に皇牙は骸延を引きつれ、流琉と蘭はその間に野営場所に義勇軍を移動させることとなった。

「自己紹介が遅れたな、うちは張遼、字は文遠や。それにしても噂の若獅子があんたみたいいな女の子だとは思わんかったわ」

その女性……張遼の台詞に皇牙は溜息をつく。

「張遼殿……俺は男です」

「うそお！？」

そんな感じで世間話をしていると一つの天幕の前に着いた。

「ここやここや。連れて来たで」

「入っいいいわよ」

中から声が聞こえると張遼が中に入り、続いて皇牙と骸延も中に入った。そこには銀色の髪の毛の気弱そうな少女とその傍らに緑の髪に眼

鏡をかけた気の強そうな少女が立っていた。

「お初にお目にかかります。姓は獅王、名を皇牙と申します。義勇軍二百を率い、馳せ参じました。こちらは我が軍の軍師、骸延です」

皇牙が先程よりも丁寧に挨拶をする。紹介された骸延も二人に向かって頭を下げる。

「ご協力いただきありがとうございます。あなたの勇名は聞いております。私は官軍の総大将の董卓、字は仲穎と申します。総大将とは言ってもほとんど詠ちゃんにまかせつきりなんですけど……」

董卓がそう言って隣の少女を見る。するとその少女も自己紹介を始めた。

「董卓軍軍師の力駆、字は文和よ。あんたたちの噂は聞いてるわ。正直今は猫の手も借りたい状況だし、あてにさせてもらっわ」

その後、軍議になったら呼ぶと言うことで皇牙たちは自軍に戻ることにあった。

「董卓殿は良い主のようだな。兵たちも良い顔をしている」

「確かに。いささか優しすぎるくらいがあるがその部分を補える将もいる。内部に問題はあるまい」

そう言いながら進んでいくと義勇軍の前に桃色の髪の女性二人と黒髪に眼鏡をかけた女性が立っていた。三人の共通点は胸が大きいということだが皇牙はそう言うことに興味がなく、普通に話しかける。

「我が軍に何か御用でしょうか？」

皇牙の言葉に女性たちは振り返る。

「我が軍？もしかやお前が今噂の若獅子か？」

「いかにも。俺が獅王皇牙ですが？」

皇牙に桃色の髪の女性が語りかける。

「ふん、こんな女の子がね」

もう一人の桃色の髪の女性がそう言って視線を皇牙に合わせる。皇牙は十三歳のため、身長はまだそれほど高くないのだ。

「あの……俺は男ですが……」

「「「え？」」」

皇牙の言葉に三人の声が重なる。どうやら三人とも皇牙が女だと思っ
ていたらしい。

「あはははは！それはすまなかつたな！私は孫堅、字は文台だ。
こっちは娘の孫策と軍師の周瑜だ」

「孫策、字は伯符よ。よろしくね」

「周瑜公謹だ」

三人が自己紹介すると皇牙も骸延を紹介し、そして本題に入った。

「それで、孫堅殿は何用で我が陣に？」

「なあに、今噂の若獅子を一目見ときたかつただけだ」

「なるほど……それで、俺はあなたの目に適いましたか？」

「ふふ、さてな。ではまたな」

そう言うと孫堅たちは自分たちの陣に戻っていった。残された皇牙
と骸延はその後姿を見送っている。そして姿が見えなくなると骸延
が皇牙に語りかける。

「皇牙よ、天下への道……やはり容易くは行かん」

「うん……」

皇牙は孫堅の強大さを感じ取っていた。一方の骸延は……

「（周喩といったか……手強そうだが、そこなくてはな）」

孫堅の軍師である周喩と相対する日を楽しみにしていた。

（SIDE：SONKEN）

私は孫堅、字は文台、真名は美蓮^{みれん}だ。今私は噂^{みれん}になっている若獅子
こと、獅王皇牙に会ってきた。あの容姿で男^{みれん}つてのは驚いたな……

「雪蓮、冥琳、獅王のことどう見る？」

後ろにいる娘と軍師に語りかける。まず口を開いたのは冥琳だった。

「只者ではないと思います。今はまだ弱小ですが、国を得て、勢力を広げればかなりの脅威になるかと」

それに続いて雪蓮が口を開く。

「そうね、腕が立ちそうだし。まあどれくらい強いかは戦ってみないとわかんないけどね」

「恐らく奴らはこの戦で手柄を立ててどこぞの県令になることが目的だろう。今のうちに同盟の下地でも作っておくか？」

「それがよろしいかと。一目見た印象ですが彼らが手柄を立てないのはいえないと思います。それに……あの軍師、ずっと我らを観察しているようでしたし」

確かあの覆面の軍師……骸延とかいったな……あいつもかなりのやり手みたいだったしな。まあ、まずは次の戦でお手並み拝見だな。

〈SIDE END〉

第六幕 若獅子、虎と出会う（後書き）

というわけで第六幕でした。董卓は史実では冀州の黄巾党と戦っていたのですが後々のストーリーのため、変更して荊州に来てもらいました。

では今回のキャラクター列伝をどうぞ。

キャラクター列伝その四

名前：羅候らこう

性別：男

詳細：銀河戦国群雄伝ライの登場人物で主人公・竜我雷のライバル。銀河の南、南天の部族国家・練国の先代国主・羅鶴らかくの嫡男。弾正による南天征伐の際に父・羅鶴が狼刃に討ち取られると国主となり、兵権を引き継ぐ。

もともと南天は多くの部族の入り混じった地域であり、羅候は南天の国家の一つ、南蛮の血を継いでいるので顔は人間だが耳が虎の耳である。もともと、練国には当然普通の人間も存在する。

弾正の南征を退けた後、しばらくの間は智国の属国となっていたが弾正亡き後、五丈と結託して智国最大の実力者・独眼竜正宗を失脚させ、南天の盟主にのし上がる。

父の羅鶴が南蛮王・琥瑛罵州くえいばすと親しかつたことから琥瑛罵州の娘・
邑峻ゆしゆんと許婚となり、妻に娶る。琥瑛罵州の死後、彼の遺言により琥
瑛罵州の三人の息子を差し置いて南蛮国の王位を手にした。
竜我との邂逅は弾正の南征のおり、父の仇・狼刃を攻撃した際に竜
我に阻まれ、一騎討ちを演じたが決着がつかなかった。
竜我が五丈王となつてからも宿敵として対立し続ける。天下統一を
賭け、北伐を開始するが六紋海ろくもんかいの決戦で竜我軍軍師・大覚屋師真の
奇策によつて大敗。多くの配下を失う。
しばらくは情緒不安定となつていたが配下の激励や五丈に捕らわれ
ていた邑峻の帰還を受けて立ち直り、大軍団再建に乗り出す。
竜我の南征の際に大將軍・姜子昌きやうししやうの戦略を却下し、反対を押し切つ
て出撃するも敗北。首都を放棄して南蛮王国まで撤退し、軍団の再
建に取り掛かるもその強引な方法から南蛮国から反感を買う。
姜子昌の死を聞いた羅候は再び五丈との決戦に出るが大勢を変えら
れず、最後は竜我に討ち取られた。
当初は度量の大きさを見せ、南蛮の王位を継ぐ際に正式な皇太子が
いながら羅候が王になることを嫌つた将が羅候を襲撃したがその心
は国を思つてのことだと理解し、許したこともある。
しかし次第に傲慢さが目に付くようになり、五丈を征し、天下統一
のあかつきには五丈の民の虐殺・奴隷化を考えていた。
他にも親友である大將軍・姜子昌の策を妻である邑峻が見栄を重視
して拒んだことに同意し、却下したり、些細なことで重臣を更迭な
いし誅殺し、自軍を弱らせる。
戦でも負けるたびに酒に溺れ、姜子昌たちに励まされてようやく立
ち直る。
五丈の軍師・大覚屋師真や正宗の知恵袋・飛竜からも『兵馬を持つ
て有頂天になつている』『野心を弄ぶ事しかできない』と酷評され
ていた。
しかも私生活においてもキツチリ政務をこなす竜我と対照的に政務
をほつたらかして妻の邑峻と飲酒・情眠するばかりであった。

王としては欠点が多かったが武は超一流で最終決戦では五丈の誇る
猛将たちと数万の軍団をたった一人で突破し、竜我の元までの単騎
駆けを果たした。

第七幕 若獅子、軍議に出る（前書き）

随分お待たせしました。お待たせした上に短いですがご容赦を・・・

力駆の『か』がどうしても変換できない・・・誰かどうやら
たら出るか知りませんか？

第七幕 若獅子、軍議に出る

孫堅と話をした翌日、皇牙は董卓に軍議をするということ呼び出され、骸延と共に天幕に向かっていた。

「骸延、ここに集まった主だった将は？」

「ふむ、それなりに数がいるがやはり董卓、それに孫堅。あとは公孫賛、劉表が有力だな」

この黄巾討伐に参加した諸侯の中で骸延が有力なもの名前を挙げる。

「そうか、それほど多くないな」

「そもそもこの大陸で有力なものもそれほど多くはない。曹操や袁紹は河北の黄巾賊と戦っているらしいしな」

皇牙と骸延が話しながら歩いていると天幕の前で赤い髪の少女と出くわした。

「あなたは……」

「ん？黄巾討伐に来た諸侯か？私は公孫賛、字は白珪だ。お前は？」

「俺は義勇軍を指揮する獅王皇牙といいます」

皇牙の言葉に公孫賛は驚いたような顔をする。

「おお！お前が今噂の若獅子か！お前の噂は聞いているよ」

「光栄です」

「……無理に敬語を使う必要はないぞ？私も使っていないしな」

「ん……そうか」

皇牙はそれを聞くとすぐに本来の口調に戻った。

「そちらの男は？」

「こっちは軍師の骸延だ。覆面については以前に顔に大怪我をしてな……気にしないでくれると助かる」

「ああ、気にしないさ。こんな世の中だ、大怪我をしてる奴なんか珍しくないしな」

笑いながら答える公孫贄に若干の罪悪感を覚える皇牙だった。

それからしばらくして、皇牙と公孫贄を含む黄巾討伐に來た諸侯は
天幕の中で軍議を始めていた。軍議の進行は力駆が行っている。

「それじゃあ軍議を始めるわ。私たちの総兵力が約三万、それに対
して黄巾賊は六万。しかも黄巾賊は皆に籠っていて迂闊に手が出せ
ないのが現状よ」

力駆の言葉に皇牙は手を顎に当てて考える。他の陣営の將たちも何
らかの策を出そうと考えている。

「しかも斥候の情報では援軍も迫っているらしいわ。できるならそ
の前に皆を落として黄巾の援軍を迎え撃ちたいんだけど……」

「僭越ながら、申し上げます」

すると骸延が口を開く。その姿に董卓と力駆、孫堅と孫策、周瑜に
公孫贄以外の諸侯から「義勇軍風情が生意気な」とか声上がるが
力駆は「言ってみなさい」と発言を許す。

「はっ、敵の数は多数。さらに皆は堅固となれば皆内に我が軍の兵
を侵入させて火を放ち、外から攻め寄せて討ち取るが上策と存じま
す」

「けど、どうやって兵を侵入させるの？」

力駆の質問に骸延は即座に答える。

「その点は問題ありませんまい。まず少数の兵で黄巾を挑発します。数に勝る黄巾賊はこれを破ろうと向かってくるでしょう。その際に適当に戦って撤退し、その混乱の中で黄巾に紛れ、砦内に兵を侵入させればよろしいかと」

実はこの策、事前にこの辺りの情報を集めていたため、軍議が始まる前から考えていた策であった。真つ先に策を献策し、採用されれば一応の手柄となる。あとは獅王軍の将が敵将を討ち取れば言うことなしである。

「……確かにその策が良さそうね。で、侵入させる人員は？」

「それだったら私の軍に適したものがいる。その者たちに行かせよう」

名乗りを上げたのは孫堅であった。

「ふむ、ですが孫堅殿の軍だけに任せるわけにも行きますまい。何よりこれは私が献策した策。獅王軍からも人員を出しましょう」

骸延はそう言うと皇牙に目を向け、皇牙も頷く。

「その人員にはこの獅王皇牙が出ます」

すると周りはざわめきだし、公孫贛はおろか孫堅ですら目を丸くし

ている。だが、それも当然だ。軍の將軍ならとにかく君主が侵入部隊に志願するなど普通ならありえないことだからだ。もつとも、これも骸延と相談していたことだった。数の少ない皇牙の軍では戦果を上げにくい。数が少ないからこそ後曲に回される可能性もある。だが、侵入部隊ならば火を放った後に敵将を討ち取る機会もある。そうすれば敵将を討ち取るという手柄も上げることができる。手柄を立てねばならない皇牙たちにとってはなりふり構ってられないのである。

「そう……いいわ。じゃあ次に敵を釣り出す役目だけど……」

「それは私がやろう。機動力には自信がある」

名乗りを上げたのは白馬義従の公孫釐であった。その後、反対意見もとくに出ず、その策が採用されることになったのだった。

第七幕 若獅子、軍議に出る（後書き）

ちなみに白蓮はすでに桃香たちがいなくなった後です。

第八幕 武將たちの感想、そして若獅子行動開始（前書き）

よ、ようやく更新……お待たせして申し訳ありませんでした！（土下座）

今回は難産でした。どうにも皇牙以外の視点が上手く書けない……とりあえず今回は主だった諸侯の中から2名と武將1人の皇牙への印象です。

感想お待ちしてます。

第八幕 武将たちの感想、そして若獅子行動開始

SIDE：KOUSONSAN

私は幽州太守の公孫贇、字は伯圭、真名は白蓮だ。私は今、荊州の黄巾賊を討伐すべく涼州の董卓や長沙の『江東の虎』孫堅、最近名が売れている義勇軍の『若獅子』獅王皇牙らと共に討伐軍として皆に籠った黄巾賊と戦おうとしていた。

河北のほうにも黄巾の本隊はいるらしいがこちらは陳留の曹操や私の旧友の桃花……劉備たち義勇軍が相手しているだろう。

今回私は我が軍自慢の白馬陣の機動力を生かして皆から黄巾賊を誘き出す役目を得た。そうして黄巾を誘き出し、皆内にこちらの兵を侵入させるのが狙いだ。

しかし獅王皇牙か……桃花のところに行った北郷と言い、こんなに短い期間に会うとは私は天から来た人間に縁があるのだろうか？

北郷とは『若き獅子』の占いが出回った後、最近になって新たに流れ始めた占いにある『天の御使い』と呼ばれている男だ。

だが、北郷は確かに見たこともない服を着ていたがそんなに大した男には見えなかった。それよりもその近くにいた……司馬懿とかいう男のほうが上のようにも感じた。

それに比べて獅王は……なんというか勝てる気がしなかった。最初見たときは美しい炎髪灼眼に綺麗な顔で本当に女みたいで男と聞い

たときは女として自信がなくなりそうになったが……だが一目見て、
こう圧倒的な存在感があった。もしかしたらあれが以前、櫛植先生
が言っていた王の器というものなのだろうか……

それはさておき、獅王は今回の策で義勇軍の総大将であるにもかか
わらず皆への潜入を買って出た。そんなことをするのはただの馬鹿
か……もしくは余程自信があるかのどちらかだ。義勇軍の軍師とい
う骸延が止めなかったことから恐らく後者だと思つ。

「公孫贇殿」

準備が整つた私のところに骸延がやってきた。

「準備はどうですか？」

「ああ、もう整っている。あとは出陣するだけだ」

覆面で顔は見えないがおそらく陣中見舞いのようなものだろう。つ
と、どうせだ気になったことを聞いてみよう。

「骸延、獅王は義勇軍の大将でありながら潜入部隊になったのはや
はりそうとう自信があるのか？」

「無論、我が主は智勇に秀でております。賊如きに後れを取ること
はないでしょう」

「そうか……わかった。では骸延、獅王に武運を祈ると伝えてくれ」

「はっ、公孫贇殿も……」

そう言つと骸延は私に背を向けて去って行つた。さて、間もなく出陣だろつ。行くか。

〔SIDEEND〕

〔SIDE:SONKEN〕

軍議の後、私たち孫家の軍は囷となつて黄巾を誘き出す公孫贇軍の撤退支援と砦への潜入を行うこととなつた。

部隊を二つに分け、少数を砦への潜入に、そして残りは公孫贇軍の支援に向かうという具合だ。問題は潜入部隊への人選なのだが……

「だゝから、私が行くつて言つてるでしょ？」

さつきから私の娘、雪蓮が行くと言って聞かないのだ。それを聞いて軍師の冥琳が頭を抱えている。

「駄目、お前は孫家の跡継ぎなのだぞ？こんな戦で命を危険に晒すことはない」

「ぶ〜、でも皇牙は潜入部隊にいるわよ？」

ふむ、それは私も驚いた。いくら義勇軍とはいえ大将が潜入部隊に志願するとは……だが……

「向こうはこの戦で功績を立てねば義勇軍のままだ。私たちとは違う」

その通り。今回の戦で獅王は功績を立ててどこぞの太守なりになるうとしている。それができなければ義勇軍のままだ。だから獅王が潜入部隊に志願したのだろう。見た限りあの中で最も武勇に秀でているのは獅王だ。

「だって皇牙がどれだけ強いかきになるじゃない〜」

「それが本音か……」

冥琳が呆れ気味に声を出す。まあ確かに獅王の実力は気になるが……

「他の兵たちの報告で我慢しろ。冥琳、潜入部隊の人選は任せるぞ」

「御意」

「え〜、何よ母様〜」

しばらく雪蓮がぶ〜ぶ〜言ってたが無視だ。さて、獅王はつまくや
つてくれるかな？

〜SIDE END

〜SIDE・TYORYO〜

暇やな〜、うちは董卓軍の張遼、字は文遠、真名は霞や。うちら董

卓軍は義勇軍の獅王と孫堅軍が潜入して皆で騒ぎを起こしてから攻撃を開始することになった。

それまではいつでも出撃できる状態で待機することになったるんやけど……ホンマに暇や……

それにしても獅王に会ったときは驚いたわ。あんなに綺麗な顔して男やなんて反則やろ。せやけど腕は立つと思う。まあこの辺はうちの武人としての勘やけどな。機会があったら手合せしたいわ。

〈SIDE END〉

「兄様、孫堅軍の人たちの準備ができたそうです！」

「わかった、俺たちも行こう」

流琉が皇牙に伝えていくると皇牙も立ち上がり、流琉を伴って歩いていく。今回の潜入には皇牙の他に流琉も行くことになっていた。二人の手には黄色の布が持たれており、潜入任務に使用するのだ。それとプラスして同士討ちを避けるため、右腕に白い布を巻くことになっていた。

「あ、獅王さんですね？お初にお目にかかります、孫堅軍の周泰といます。孫堅様から話は聞いています。今回はよろしく願います」

皇牙たちが潜入部隊の集合場所に行くとそこには皇牙たちと同じく黄色い布を頭に巻き、右腕に白い布を巻いた集団がいた。そしてそこから黒く長い髪に背中に大太刀を背負った少女がやってきた。

「こちらこそ……獅王皇牙です。こっちは我が軍の将、典偉です」

「よろしく願います！」

皇牙の紹介を受けて流琉が頭を下げる。

「ではそろそろ参りましょう！潜入するまで隠れられる場所は確保してありますので」

そう言われ、皇牙と流琉は周泰の案内のもと、他の部隊の人間たち

と共に潜入の時まで身を潜めるのだった。

そしてそれから数刻後、 囀となる公孫贗軍出陣の銅鑼が鳴り響いた。

第九幕 若獅子、手柄を挙げる（前書き）

更新です。前回よりは早く更新できた。そして久々にあとがきにキ
ヤラ列伝を載せました。

あと主人公設定の皇牙の容姿を少し変更しました。

感想お待ちしています。

第九幕 若獅子、手柄を挙げる

皇牙たちが潜入のために身を隠した頃、公孫贇軍もちょうど黄巾と戦うため、足を進めていた。

その公孫贇軍の中には蘭の姿もあった。実は出陣前に骸延の頼みで囷役となる公孫贇軍に従軍させてもらったのだ。

骸延の狙いとしては蘭に少しでも多くの実戦を経験させること。蘭も武に秀でているため公孫贇の足手まといにはならないだろうという考えだった。

「よし、全軍出陣！黄巾を誘き出すぞ！」

公孫贇の檄が飛び、兵たちが騎馬で駆け出す。蘭はそこで公孫贇の横に同じく馬で並走していた。

「姜維、だったな。遅れるなよ？」

「はい！」

公孫贇の言葉に蘭は元気よく返事をする。すると公孫贇軍は皆にある程度近付き、公孫贇が砦の前に躍り出る。

「世を乱す黄巾の賊徒共！貴様らはこの幽州太守、公孫贇が相手をしてやる！貴様らに我が軍と戦う度胸があるならかかってこい！」

「ちっ、あの程度の数でなに言ってやがる！野郎共、やっちなまえ！」

挑発を受けた黄巾賊は公孫贄軍の数が自分たちよりも少ないのを見るとすぐに砦を出て突撃してきた。

「よし！行くぞ！」

公孫贄を筆頭に騎馬隊は黄巾賊に向かっていく。

「足を止めるな！駆け抜けろ！」

その言葉通り、騎馬隊は走りながら黄巾賊に攻撃を加えていく。

「はあああああ！！！」

公孫贄は馬を走らせながら自身の剣を振るって黄巾賊を切り裂き、さらに走っている騎馬に踏まれて黄巾賊を蹴散らしていく。

流星は幽州で『白馬將軍』と呼ばれる公孫贄率いる騎馬隊である。しかも公孫贄は異民族との戦いを潜り抜けている。歩兵がほとんどであり、正式な訓練もろくに受けていない黄巾賊では数の有利がなければすぐに崩されているだろう。

「てやあああああ！」

蘭も必死に公孫贄に追走し、馬上で槍を振るっている。やはり公孫贄たちほど騎馬の扱いに慣れているわけではないので彼女たちほど敵を倒せてはいないが、それでも近づいてくる敵を的確に倒している。

「相手は少数だ！数で押せ、数で！」

しかしいくら鍛えられた兵とはいえやはり数の差を覆すのは難しい。

「公孫贇殿、そろそろ頃合いだと思います」

「ああ、わかっている。全員一時退却だ！」

公孫贇の号令と共に騎馬隊は黄巾賊に背を向け、撤退していく。

「逃がすな！追え追え！」

黄巾賊の指揮官が撤退する公孫贇軍を追うように指示を出す。黄巾賊は歩兵、対する公孫贇軍は騎馬兵である。公孫贇軍に追いつけるはずもなく、早々に諦めて砦へと戻って行った。

そしてその中には戦いのドサクサで紛れ込んだ皇牙たちの姿もあった。

「ふう、とにかく私たちの役目は終わったな」

その頃、撤退を完了した公孫贇や蘭たちは討伐軍の陣に戻ってきていた。

「公孫贇殿、お疲れ様です」

そこに公孫贄の労を労うため、骸延がやってきていた。

「あ、師匠！」

やってきた骸延を見つけ、蘭が近づいてくる。

「骸延か、姜維は優秀だったぞ。うちの軍に欲しいぐらいだ」

「きよ、恐縮です」

公孫贄に褒められ、蘭が顔を赤くして照れる。

「ふむ、弟子を褒められるとは有り難いですな。しかし、黄巾をうまく釣り出すことができましたな」

「ああ、あとは獅王がうまくやってくれるかどうかだな」

それから数刻、皇牙たちは黄巾の砦内に潜入して各々が工作を開始していた。皇牙と流琉も砦の中を歩きながら兵糧庫や武器庫の裏手、人気がない場所で火計の準備をしていた。

「（こうしてるとやっぱり色々違うな……）」

火計の準備をしながら皇牙は自分がいた世界を思い出す。皇牙がいた世界では火薬を使って吹き飛ばすのがほとんどで、それを専門にする工作兵もいた。

しかしこちらの世界ではまだ火薬の類はなく、こうして薫などに油をかけて燃やすのが普通だった。

「よし、これで準備はできたな。あとは暗くなるのを待つぞ」

「はい、兄様」

返事をする流琉と共に辺りを警戒しながら、それでいて怪しまれないように皇牙たちは時間が経つのを待つ。

ちなみに皇牙と流琉は頭に黄巾の布を巻いており、皇牙は普段のポニーテールではうまく巻けないため、髪を下している。そのため、すでに完全に女性にしか見えない。

「兄様、ちょっと良いですか？」

「ん？どうした？」

ふと、皇牙に流琉が話しかけてくる。

「兄様はどういう女性が好みなんですか？／＼／」

流琉が若干顔を赤くしながら訊ねる。その質問が意味することはだいたいの人間は解るだろう。しかし……

「…好み？……あまり考えたことがないな」

今まで女性との付き合いがない皇牙である。どうにもこういつことには少々疎い。

「兄様は女性とお付き合いしたことがないんですか？そんなに綺麗なお姿なのに……」

「国を継いでからは勉強と鍛錬に明け暮れてたからな……色恋というのはしたことがない……」

「…そうなんですか……」

どこかホツとしたような感じの流琉であった。勿論、皇牙にもそう言った知識はある。男女間の恋愛から夜のことまで全て国を継ぐ際に勉強済みである。

もともと、それは国の国主としては当然の知識である。国の主である以上、跡継ぎのこともあるため皇牙が勉強した中にそういった内容があったのだ。

「む？そろそろ時間か？」

流琉と話していると辺りが暗くなり始めていた。それを見て皇牙は

藁に火を着けようとする。

「おゝい、お前らこんなとこで何やってんだ？」

しかしそこに黄巾賊の一人が歩いてきた。顔が赤くなっているところから見ても明らかに酔っているのだろう。勿論、腕に白い布を巻いていないので味方ではない。

「いえ、別に……」

火を熾そうとした火打石を隠す。すると皇牙と流琉に寄ってくる。

「ん？へっへっへ別嬪な姉ちゃんと可愛い嬢ちゃんがいたとはな
〜……俺たちのとこで酌してくれよ〜」

酔っぱらった男は皇牙の手を掴む。その際に皇牙の手から火打石が落ちたが男はかなり酔っぱらっているらしく特に気にも留めなかった。

ちなみに『別嬪な姉ちゃん』は皇牙のことで『可愛い嬢ちゃん』は流琉のことだ。

「そこには……大将もいますか？」

皇牙は出来るだけ女性のフリをしながらこれ幸いと男に情報を訊ねる。

「ああ、勿論いるぞう。全員揃ってるからな〜」

美少女だと思っている皇牙に男は機嫌よく答える。

「そう……わかった…私が行く。妹はまだ仕事があるからここに置いていくわ」

「ふうん、まあいいぜ」

皇牙は女性のフリをしながら男の言うことに従う。男も自分の言うことに従った皇牙に機嫌を良くし、了承する。

「に…！」

流琉は男と共に行く皇牙に追い縋ろうとするが皇牙はそれを手で制する。

「後を…お願いね？」

「……はい」

皇牙の眼を見た流琉は二人の姿を見送ると地面に落ちた火打石を拾い、中断されていた藁に火を着ける作業に取り掛かった。

一方、男に連れて行かれた皇牙は大きめの天幕の前に来ていた。

「ここだここだ、お頭！別嬪の女を連れてきましたぜ！」

男が天幕の中に入っていくと皇牙もその後が続く。

「おお！いい女じゃないか！黄巾の中にこんないい女がいたのか！」

天幕に入った皇牙を待っていたのはこの黄巾賊の首領とみられる髭面で頭に黄巾を巻いた大男と他にも数名の男たち、そして恐らくどこからか攫ってきたであろう女性たちが男たちに酌をさせられていた。

彼女たちが来ている服はまだ無事な者もいるが何人かはとところどころボロボロになっている。なんだか襲われたのだろう。虚ろな目で機械的に酌をする者もいる。

「おい、こつちに来て酌をしろ！」

皇牙は首領の指示通り、酒瓶を手取る。だがその直後、天幕の外が騒がしくなり始める。

「何事だ！」

「大変です！砦のあちこちから火の手が！」

天幕に黄巾の兵が駆け込んでくる。その言葉に一気に天幕内部が慌

ただしくなり始め、周りにいた黄巾の男たちも立ち上がる。

「おい……」

首領を初め、他の黄巾の男たち全員の意識が天幕の外に向いたのを見た皇牙は逆隣りに座っていた少女に話しかける。

「な、なに？」

黄巾と見られる人物に話しかけられた少女はビクビクしている。

「俺は義勇軍の人間だ。今のこの騒ぎは俺の仲間たちが起こしてる。君はこの女性たちを俺の後ろに集めてくれ」

小声で少女に今の状況を簡単に説明する皇牙。指示を出された少女は若干迷うがすぐに頷いて周りの女性たちに話しかけ始める。皇牙も首領たちに注意を払いながら女性たちを一ヶ所に集める。

「あ？なにしてんだ？」

皇牙たちが女性たちを一ヶ所に集め終えた直後、黄巾の一人が皇牙たちに気付く。皇牙は少女たちにジツとしてると指示して少女たちの前に立つ。

「折角の戦利品が逃げたら大変なので……」

「そうかそうか…そいつはご苦労さ……ま？」

男が言葉を発しきる直前、皇牙の右腰の太刀が引き抜かれ、男の首を切り落とした。

「っ！？テメエ！」

男の首が切り落とされた光景に天幕の外を見ていた黄巾の首領や男たちが気付く。すると皇牙はもう片方の太刀も引き抜く。

「俺は義勇軍総大将、獅王皇牙！お前たちの悪事もここまでだ！」

「っ！このアマ！」

皇牙の言葉に激昂した黄巾の男の一人が切りかかる。

「ふっ！」

「ぎゃあ！」

しかし皇牙は男の剣が振り下ろされる瞬間、左の太刀で男の両腕を切り落とす。さらに右の太刀で無防備になった男の首を切り落とした。

「テメエ……」

仲間が殺されたのを見た首領と男たちは皇牙に切りかかる準備をする。

「この騒ぎもテメエの仕業か！？」

「はっ、今更気付いても遅い。もう討伐軍が砦の中に流れ込んでくる。そしてここで俺がお前を討って終わりだ」

首領の怒鳴り声に皇牙は嘲笑うように返す。すると首領の顔が怒りで真っ赤になる。

「ほざけ！ テメ工見たいな女にこの張曼成がやられるか！ 野郎共、やっちまえ！」

首領が周りにいた男たちに命令する。しかしその前に皇牙が男たちに向かって駆け出す。

「一つ教えておいてやる……俺は男だ！」

「ガツ！？」

その言葉と共に嵐は左手の太刀を投擲。投擲された太刀は黄巾兵士の一人の脳天に突き刺さる。

「ふっ！」

さらに脳天に太刀が突き刺さった男の隣にいた兵士の首を右手の太刀で切り落とす。そして倒れた男に刺さったままの太刀を逆手で引き抜くとそのまま近くにいた男の咽喉を掻っ切る。

「この！」

瞬時に三人を斬殺した皇牙に近くにいた兵士が剣で斬ろうとするがそれよりも速く腹を斬られる。

腹部を斬られ、血を噴き出させながら男が倒れる。その噴き出した返り血が皇牙の身体を髪や瞳の色と同じ紅に染められる。

「ひい！」

瞬く間に兵士を屠る皇牙の姿に黄巾の兵士たちは恐れを抱き、一度抱いた恐れはそう簡単に消えることはない。

「ば、化け物だ！」

「こ、こんな奴相手にしてられるかよ！」

「お、おいテメエら！逃げんな！」

そして次々と兵士たちが我先にと天幕から逃げ出していく。その兵士たちを張曼成が呼び止めようとするが所詮は烏合の衆である。皇牙は周りの兵士を呼び止めようとする張曼成に向かっていく。

「だったらお前が来い！」

「ぐ、この糞餓鬼があ！」

張曼成が手に持った剣を振り下ろす。

「遅い！」

だが振り下ろされた剣は空を切り、皇牙は振り下ろされた剣を持つ張曼成の腕を切り落とす。

「ぎゃああああああ！！」

腕を切り落とされた張曼成は痛みの余り蹲る。一方の皇牙はそれを見下ろして太刀を振り上げる。

「た、たす…助けて……」

「お前はそう言った人々を助けたのか？」

命乞いをする張曼成に皇牙は冷酷に言い放つ。そして……

「ひ、ひい!!」

皇牙の太刀は振り下ろされた。

「きゃあ!!」

張曼成の首が転がり落ち、一ヶ所に集まっていた女性たちが悲鳴を上げる。

「兄様、ご無事ですか!!」

「獅王さん!!」

すると天幕の中に流琉と周泰が駆け込んできた。肩で息をしていることからかなり急いで敵を倒しながらここまで来たのだろう。周泰はここに来る流琉と途中で合流したようだ。

「流琉か、俺は大丈夫。外はどうだ？」

「あ、はい。討伐軍の方々がすでに砦の制圧をあらかじめ完了させました」

「よし、総大将も討ち取ったし…これで俺たちの目的も達成できた

な

皇牙はそう言いながら太刀を鞘に納め、転がっている張曼成の首を布で包んで手に持つ。

「周泰殿、その人たちは黄巾賊に捕まっていた人たちだ。手厚く保護してやってほしい」

「わかりました！すぐに孫堅様に使いを出します！」

「お願いします」

それだけ言うと皇牙は一人、天幕の外に出て張曼成の首を高々と掲げる。

「敵総大将、張曼成！『若獅子』獅王皇牙が討ち取った！！」

皇牙の大声が砦内に響く。この後、この砦に向かっていた黄巾の援軍も討伐軍によって蹴散らされた。援軍の黄巾賊たちは砦が落とされたことに士気がガタ落ちになり、さらに数も砦にいたよりも明らかに少なかったため、一方的な戦いになった。

こうして荊州黄巾賊との戦いは終わりを告げた。

第九幕 若獅子、手柄を挙げる（後書き）

キャラクター伝

名前：姜子昌きりょうしんじやう

性別：男

詳細：南天の部族国家・練国の武将で羅候が南天王になった際には大將軍に就任している。羅候の幼馴染で竹馬の友。君臣の間柄を超えた親友で公の場以外では羅候を呼び捨てで呼ぶ。智の独眼竜正宗の腹心・飛竜とは同じ学問所で学んだ同門の士である。

弾正による南征の際には練の先代国主・羅鶴の南天連合参加を強く諫めたことで羅鶴の怒りを買ひ、蟄居謹慎させられる。弾正を撃退した後、職務に復帰。羅候を天下人にすべく知略を巡らし、五丈の骸羅と手を結び、正宗を失脚させる。何度か天下統一のための策を考えるが竜我の軍師・師真の羅候の情を利用した策や時として羅候の妻・邑峻の見栄っ張りにより却下されることもあった。

竜我率いる五丈との北京沖会戦にて羅候に首都を放棄（の擬態）をする策を提案するが見栄を重んじた邑峻に反対され、さらに羅候に地位を剥奪される。

それでも羅候を見捨てず、南天軍の敗北後、首都・大王里だいおうりを五丈が占拠したとき、南天の月を大王里に落とし、住民たちを犠牲にして竜我を討つ為の策・月落としを敢行する。

しかしそれでも竜我を殺せず、多くの部下を死なせ行方を眩ます。その後、智の滅亡後銀河各地を放浪していた飛竜と結託し、飛竜に

己の首をとらせ、自分を探している竜我に献上させ、隙を突いて竜我を殺す暗殺計画を立てる。

文字通り自分の命をかけた策であり、飛竜は姜子昌の首を持って竜我の元に行き、見事毒の塗られた短剣で刺すことに成功したが竜我はそれを乗り越え生き延びた。

優れた智将であり、謀略によつて正宗を失脚させ、羅候を南天王まで押し上げたが五丈の師真からは「教養では骸延の劣り、軍事的センスでは正宗に劣る」と評された。

第十幕 若獅子、太守となる（前書き）

更新です。前回の更新で感想が一件もきてない…OTL…

まあクロス先を知ってる人が少ないってのも原因かもしれませんがね……今回は短いです。

次回か次々回辺りでライのキャラが出る予定です。

感想非常にお待ちしています。あとがきのキャラクター列伝もどうぞご覧ください。

第十幕 若獅子、太守となる

荊州黄巾党壊滅から一週間、討伐軍の陣には朝廷から今回の戦の恩賞授与のための使者が訪れていた。

討伐軍に参加していた諸侯は順々に朝廷の使者から恩賞を受け取っていき、ついに皇牙の番となる。

「獅王皇牙、そなたを諷陵の太守に任命する」

「はっ、謹んでお受けいたします」

朝廷の使者の前で皇牙は頭を下げて礼をとる。

「これが太守の印綬である。受け取られるがよい」

「はっ」

元の世界では小国とはいえ一国の国主だった皇牙。こういった礼儀はキツチリとしていた。

恩賞の授与が終わった後、皇牙は任地となる諷陵へ向かうために軍を纏めていた。

「とりあえず最初の目的は達したな」

「だが、これからが本番だ。俺たちには足りないものが多いからな。皇牙たちは数が僅か二百程度の義勇軍である。自分たちが治める地こそ決まったがまだまだ足りないもの……特に人材が不足している。任地となる諷陵でそういった足りないものを得ていかなければ天下など夢のまた夢である。」

「獅王、もう立つのか？」

そこに公孫贇がやってきた。この一週間で皇牙は公孫贇や孫堅といったいくつかの諸侯と交友関係を築いていた。これらの関係を後々に生かそうと考えているのである。

「ええ、一刻も早く諷陵に到着したいので」

「そうか、私ももう少ししたら幽州に引き上げる。またいつか会えたらいいな」

「はい、公孫贇殿もお達者で……」

皇牙がそう返すと公孫贇は自分の陣に戻っていく。

「おーい、獅王」

すると今度は孫堅が孫策、周瑜を連れてやってきた。

「どうやら目的は果たしたようだな？」

「おかげさまで……」

孫堅の問いかけに皇牙も苦笑いしながら答える。

「お前の武勇は明命…周泰から聞いていたからな。できれば私の陣営に来てほしかったのだがなあ」

孫堅は残念そうにしている。この一週間も皇牙は何度か孫堅に誘いを受けていた。

「それはご勘弁を…俺にも一応の野望がありますので」

「ふふふ、その野望が私の前に立ち塞がらないことを祈っているよ。じゃあな」

そして孫堅もまた皇牙の陣を後にしていく。最後に董卓と賈馱がやってきた。ちなみに彼女たちもこの一週間で交流を深めた諸侯の一人である。

「お発ちになるのですね？頑張ってください」

「ありがとうございます。董卓殿と賈馱殿もお達者で」

皇牙は董卓と賈馱に頭を下げて礼をする。

「獅王、今回のことは月に感謝しないさいよ？朝廷への報告、月が

あなたたちが一番手柄を立てたってちゃんと報告したんだから」

賈馱が「わかってんでしょうね？」という風に聞いてくる。実際、荊州黄巾党の本隊を叩く策を献策したのは骸延であるし、敵の総大将を討ち取ったのは皇牙である。なので今回の一番の手柄を立てたのは皇牙であるというのは間違っではない。

しかし皇牙は正規軍ではない義勇軍である。心無い諸侯ならば下手をすればそんな正規軍でもない軍の手柄を横取りする恐れもあるのである。もしも今回の討伐軍の総大将が董卓ではなくそういった諸侯であったならば皇牙は太守になれなかったかもしれないのだ。

「はい、董卓殿には感謝しています」

「へ、へう、わ、私は当然のことをしただけです／＼」

董卓は皇牙に面と向かってお礼を言われ、顔を赤くする。確かに董卓がしたのは当然のことなのだが……すでに漢王朝が腐敗しているこの時代では人の手柄を横取りするのはそう少ないことではない。

「兄様、準備できました！」

そこに流琉がやってきて出立の準備ができたことを皇牙に告げる。

「では、董卓殿、賈馱殿。俺はこれで失礼します」

「董卓様、賈馱様、お世話になりました」

皇牙と流琉は二人そろって頭を下げると討伐軍と合流した時と同じように皇牙が乗る馬に流琉が抱えられるような体勢になって任地と

なる諷陵へと旅立っていった。

皇牙が董卓や公孫賛と再会するのはもう少し先の話となる。そして皇牙たちは新天地、諷陵の地にて新たな出会いと思いがけない再会を果たすこととなる。

第十幕 若獅子、太守となる（後書き）

名前：正宗まことむね

性別：女性

詳細：銀河の南に位置する南天に存在する国の一つ『智』の女将。南天最大の實力者として竜我を始めとする多くの群雄たちから恐れられ、警戒されるほどの女傑。

『正宗』は『智』の国主が代々襲名する名前で本名は『紅玉』ベニタマ。かつての戦で片目を矢で射ぬかれ、隻眼となる。このことから『独眼』どくがんとして名を馳せるようになる。

元々は先代『正宗』の息女であったが先代が戦死し、跡継ぎであった弟『虎丸』とらまるが幼かったこともあって弟の後見人という形で『智』の国政を握る。

優れた戦略眼、行動力、軍略を持ち、その力は先代に勝るとも劣らないと評されるほど。しかし女性であるために国を継ぐことができず配下の将たちは男として生まれてこなかったことを惜しんでいた。僅かな兵を率いて北天を統一したばかりの弾正の五丈に奇襲を仕掛け、警告をする。さらに千八百万の五丈軍の南征をその知略でもって頓挫させ、南天諸国を併吞して実質上『智』を南天の盟主国に押し上げる。

その後、弾正が病没すると銀河統一を果たすべく北伐を敢行する。北伐は問題なく進んだかに見えたが傘下にあつた羅候が国主の『練』が造反。羅候は正宗の弟で自身と義兄弟となつていた虎丸を智王に据え、『智』の国政を握つたため正宗は次第に権力を失う。

それから数年して『智』と『練』の関係が悪化すると虎丸を奪還して亡命政府を樹立。失地回復のための焦りから頻繁に軍を動かす。しかしその激務が祟つて病に侵される。

そして正宗の命が僅かなことを知った五丈の総攻撃によって敗北。正宗は竜我との一騎射ちによって戦死した。かつて『正宗』の名を継いだときに女性であることを捨てたはずだったが唯一、竜我だけは惚れた男であった。竜我が銀河統一した後、実は正宗には竜我との間に息子がいたことが明らかになる。その息子は正宗が竜我との決戦に赴く前に辺境の地へと逃がされた。

第十一幕 内政と推挙（前書き）

更新です。ライのキャラは今回は名前だけで実際の登場は次回です。今回は三国志からオリキャラが2人出ます。そのうち三国志系オリキャラの設定載せます。

ちなみに皇牙が太守になった諷陵は位置的には益州の端っことで比較的荊州に近い場所です。

短い上に駄文ですがよろしく願います。

感想非常にお待ちしております。

第十一幕 内政と推挙

皇牙たちが諷陵の太守に着任してから半年が経過した。この半年、皇牙たちは街の治安維持、悪徳官吏の排除や周辺の賊の討伐に尽力していた。

皇牙の前任者は典型的に無能な人物であつたらしく、多くの商人から賄賂を受け取っていたらしい。それは前任者の配下であつた官吏も同じだつた。

そういつた者たちを皇牙は一切許さなかつた。まず賄賂を受け取っていた官吏たちは財産を没収したうえで追放処分とした。

さらに自分たちの利権を目当てに率先して管理に賄賂を渡していた商人たちも同様に追放処分となつた。中には官吏に強要され、仕方なく賄賂を渡していた者たちもいたため、そういつた者たちは一切罪には問われなかつた。

勿論、その中には虚言を吐いて罪を免れようとする輩もいた。そういつた者たちで証拠が出たものは追放よりもさらに重い処分が下され、その証拠を持ってきた者たちには何らかの恩賞がもたらされたりもした。

そうして悪徳官吏や商人から没収した財産はかなりの額に上つた。これによって皇牙たちは治水工事や農業改革などの資金確保は十分できた。

官吏の排除を終えた皇牙たちは税率を下げ、前任者が七割とつていた税を四割までに下げた。さらに諷陵に住む者たちの戸籍を作り、

管理した。

他にも現在の田畑の状況を確認し、町民や村民に不満を聞いてそれに対処するように努めていった。

皇牙たちは売官で地位を得た者たちにも目を光らせた。前任者や悪徳官吏たちは売官も行っていった。

しかしそれが必ずしも悪いことであるかと問われれば答えは否だ。売官で財政を補う場合もある。もっとも、中には地位を得たのを良いことに自分の親族を高位に付けるものがあるということだ。

皇牙たちはその中で無能な者たちを次々に切り捨て、有能な者たちはそのまま残した。

それらが終わった後で皇牙たちが直面したのは人材不足である。悪徳官吏は大半が高官であったため、それらを追放したことで人材が不足していた。

以前の悪徳官吏たちの下で働いていた中で有能な者たちを上にあげたりもしたがやはり人材は不足していた。

「それならば……」

そこで皇牙はかつてもといた世界で竜我軍の軍師だった大覚屋師真から教えられた方法を用いることにした。

まず、骸延と共同で新たな諷陵の法律を紙に書き、それを文官たちに写させて街に張り出す。そしてその文の最後にこう付け加えるのだ。

『この文に一字でも付け加えるか削るかできたものに褒賞を与える』
……と。

当然それを見た街の人々は目の色を変えて飛びついた。たった一文
字付け加えるか削るかしただけで金が貰える。それはまさに破格の
条件だった。しかしそこは皇牙と骸延の二人はそう簡単に付け加え
たり削ったりできないようにしてある。

だが金が欲しい人々は必死に法律を読み、人民には広く法が知れ渡
る。さらには街の人々の間にはこの法について互いに論じ合う輪が
生まれた。

そうして少しばかり時が経つと数十人の学識のある者たちが名乗り
出た。ほとんどは取るに足らない書き加えだったが皇牙は彼らに分
け隔てなく褒賞を出した。人民に功があれば太守は必ず報いると示
すためである。

勿論、中には見事に文章を修正して才覚を見せるものもいた。そう
いった者たちを皇牙は次々に登用し、要職につけた。

もともと皇牙は優れた才能があれば身分や家柄は一切気にしない。
むしろ才能に家柄や身分は関係ないことを知っているからだ。

かつて皇牙が傘下に入っていた五丈の国主、竜我雷はもとは何の家
柄も身分もない一平卒だった。他にも五丈の軍師の大覚屋師真も商
人の息子だった。

こうして下の位から引き上げたものや才能を認められた者たちは後々、皇牙の家臣団の中でもさらに才能を發揮していくことになる。

人材を確保した後は諷陵に出没する皇牙は賊の討伐を行った。これは治安維持の他に実戦経験が不足している蘭や流琉に骸延を補佐につけて経験を積ませることも目的としていた。

そうして賊を討伐していると中には皇牙の噂を聞き、戦う前に降伏する者もいる。そうして降伏した者たちはもともと兵だった者や兵となることを希望する者はあるものは訓練をして軍に組み込み、農民だった者は農業に関する仕事に就かせることになった。

その結果、皇牙の軍勢は諷陵に着任する前の義勇軍二百にもとから諷陵にあつた兵力五千に加え、降伏した賊たちを吸収したことで二万まで膨れ上がっていた。

「若君、入るぜ？」

皇牙が自室で政務を行っているとな人の活発的な印象の少女が部屋

に入ってきた。綺麗な蒼い腰までの髪を三つ編みにしている少女釣り上った蒼い瞳の皇牙と同じくらいの年の少女である。

「六花^{りっか}か、どうかしたか？」

六花と呼ばれた少女。彼女の名は凌統、字は公績。六花は真名である。

彼女は皇牙たちが諷陵に到着する少し前に立ち寄った村に逗留していた旅の武人であった。村に立ち寄った皇牙がこれから諷陵の太守になるといふこととその人柄に惚れて仕えさせてほしいと志願したのだ。

実は一人の女として皇牙に一目惚れして従軍を志願したという理由もあるのだが……これは皇牙が知らないことである。

実はこの六花。もとは呉郡の豪族、凌綽の一人娘であった。しかし父である凌綽が賊の討伐を行なった際に江賊の頭領に討ち取られた。そして当時、まだ六花が幼かったこともあって凌家は没落し、六花は一人で数年間旅をしていて皇牙に出会ったのであった。

「あ、いや……ちよつと……な。もしも仕事が一段落してたら一緒に飯でもどうかと思って……／＼／＼／＼／＼」

この六花。普段から男言葉を使い、一人称も『オレ』だがれっきとした女の子。それも恋する乙女である。

「六花さん、申し訳ないですけど兄様はこの後私と食事をするんです。なので諦めてください」

六花の言葉に皇牙の傍らにいた流琉がムツとし、皇牙に代わって答える。流琉は賊の討伐を終えると皇牙の親衛隊長として傍らに控えるようになった。

「それは若君が決めることでお前が決めることじゃねえだろ？」

そして皇牙を慕う六花を初めとした女性陣と日夜、皇牙を巡って火花を散らせていた。もっとも、骸延からすれば皇牙の嫁候補が増えたのは喜ばしいことではあるのだが……

「なら三人で昼食にするか？俺の仕事も間もなく終わるしな」

「むう……若君がそう言うなら」

「兄様がそう言うならいいです」

皇牙の言葉に従順に従う流琉と六花。皇牙が恋愛事に疎いのは解っていることだった。

「若君、失礼いたします」

そこにさらにもう一人、黒いロングヘアに白い眉毛の少女が入ってきた。歳は皇牙よりも少々年上でスタイルもいい少女である。一応言っておくと六花の年齢は皇牙と同じ十三でスタイルも年相応。つまりはペツタンコではないが多少出ているぐらいである。

さて、この新たに入ってきた少女の名は馬良、字は季常、真名は鈴り那なと言つて、皇牙の噂を聞いて仕官してきた文官である。

「鈴那、どうかしたのか？」

「はっ、実は若君に推挙いたしたい人物がいます……」

「推挙？」

皇牙が鈴那の言葉に疑問符を浮かべる。ちなみにいうと『若君』と言うのは皇牙のことである。皇牙の陣営の中で骸延や流琉を除く全員が皇牙を『若君』と呼んでいた。

「はい。この諷陵の近くで隠遁生活をしている者なのです。その才は智勇に秀でております」

「んだよ、そんなにすげえならなんでもっと早く推挙しなかったんだ？」

鈴那の説明に六花が口を挟む。確かにもともと皇牙の陣営は人材不足だったので優れた人材は咽喉から手が出るほど欲しい。

「何かと気難しい人物なのです。私が若君に使える際にも誘ってはみたのですが首を縦に振ってくれませんでした。ですが彼女を得れば若君の力になることは確実。若君自らが出向いていただければ彼女も願ってくれるかもしれないと考え、こうして諷陵がある程度安定するまで待つておりました」

「そうか……確かに有能な人物を得られるなら俺自らが出向くのも吝かではない。で、その人物の名は？」

「彼女は、名を『飛竜』と申します」

鈴那の口から発せられた名前に皇牙は驚愕した。

第十一幕 内政と推挙（後書き）

名前：飛竜 ひりゅう

性別：女性

詳細：智の独眼竜正宗の腹心の部下である女將軍。智勇に優れ、隠密としても高い実力を持ち、正宗の知恵袋でもある。練の姜子昌とは学友であり、二人だけが知る深い感情で結ばれている。常に正宗につき従い、いかなる戦にも従軍した。しかし練の羅候の策を看破していたものの止めることができず、正宗は失脚してしま

う。
正宗が五丈と決戦した際は竜我と共に正宗に死の際に立ち会い、遺言を聞く。

元々は正宗個人の副官だったということで正宗の寵愛の反動から正宗の死後は宮中で孤立する。

そして智王・虎丸に正宗の偉業を達成するように直訴し、その際に正宗の遺言も伝えるが叶わず。さらに虎丸は智が五丈に併呑されたのち、竜我に自殺を強要されて没している。虎丸の死後は南天を放浪し、後に姜子昌の家に寄宿する。

姜子昌と共同の策で姜子昌の首を持って竜我暗殺を画策する。姜子昌の首を持ってきたということでもうまく竜我に謁見し、毒が塗られた短剣で竜我を刺すことに成功する。

しかし竜我の「自分は何があっても死にはしない」という言葉に狼狽え、最期は竜我を暗殺しようとしたことに怒り狂った五丈の將たちに斬りつけられ、竜我に首を落とされて死亡した。

彼女の毒で生死の境を彷徨った竜我は皮肉にも彼女と同じく智に仕え、その後は町医者になっていた名医・扶華に命を救われている。ちなみに彼女が死んだのは本小説の主人公、皇牙が西羌と戦ったよ

りも後のことであり、皇牙は飛竜が竜我を暗殺しようとしたことも知らない。

第十二幕 異界にきた忠臣、その名は飛竜（前書き）

更新です。

飛竜をつまく書けているかどうかが不安だ……穴が多いかと思いきすがよろしくお願いします。

最新話と一緒に出番が多いであろうオリキャラの設定も載せます。

感想を非常にお待ちしております。

第十二幕 異界にきた忠臣、その名は飛竜

諷陵の外れ、荊州に近い小さな村の一角。そこに一軒の小さな家屋があつた。そこにかつて幾人もの英傑を恐れさせた独眼竜正宗の腹心の配下、飛竜ひりゅうの住居だつた。

飛竜がこの世界に来たのは数年前……竜我に対して暗殺を決行したとき、飛竜は竜我を毒を塗つた短剣で刺すことに成功した。

そして主を刺されたことに怒り狂つた竜我の宿将たちによつて滅多切りにされながらも竜我が毒で死ぬことを嘲笑つた。

しかしそんな飛竜に対して竜我は言つた……

『俺は何があろうと死なん！俺はそれを証明してみせる！』

その言葉を聞いて飛竜は狼狽えた……多くの英傑たちが死んでいく中で竜我だけが姜子昌の策を跳ね除け、飛竜が毒の短剣に刺されながらもその眼には死への恐怖がなかつた。そして飛竜は竜我に首を刎ねられて死んだ……はずだつた……

だが次に目を覚ました時、飛竜は荊州にある水鏡女学院と言つところで保護されていた。その後、女学院の水鏡に世話になるうちにここが自分がいたのとは違う世界であることを知り、骸延と同じように大陸を旅した。自分がここにいるなら正宗もいるのではないかと考えていたのだ。

しかし結果的に正宗の姿は確認できず、この諷陵の外れの村に居を構えることになったのだ。

「（竜我……あの男は本当に死ななかつたのか？）」

飛竜がこの世界に来て考えるのはあの日、竜我を暗殺に行った日のこと……。竜我は腹部を毒の短剣で刺され、通常なら死ぬだろう。だが竜我の眼を見た飛竜には竜我が死ぬ姿が想像できなかつた。

「（あの毒を受けては生きてはいないはず……なのに……）」

竜我の死を望んでいたはずなのに竜我が死んだ姿が思い浮かばない。この世界に来た以上、確かめようのないことだがどうしても考えてしまつ。

「御免！飛竜殿は御在宅でしょうか！」

「ん？」

そんなことを考えていると突如、家の前から声が聞こえ、飛竜は出入り口へと向かつて行った。

一方、皇牙は鈴那の案内のもと流琉と六花を連れて飛竜のもとに向かっていた。皇牙は鈴那の話から飛竜が自分の世界にいた人物の可能性があると考えた。そのことを流琉たちに話したら非常に驚かれたが……

その後、皇牙は骸延に話したところ優れた人材なら是非とも迎えたということで見解が一致し、皇牙自ら出向くことができた。

「若君、飛竜ってのはどんな奴なんですか？」

六花が皇牙に飛竜について訊ねる。この中では飛竜のことを知っているのは鈴那と皇牙だけ。鈴那はこちらの世界に来てからのことは知っているが皇牙がいた世界にいた頃の飛竜は皇牙と骸延しか知らない。

「俺も直接会ったことはないから詳しくは知らない。俺たちの世界で誰もが恐れた女傑である正宗公の腹心の部下で智勇兼備の将と言っことぐらいだ」

だが実際、赤子の時の母を、六歳の時に父を亡くし、それ以来国主になるまで閉国から出ることがなかったので正宗や飛竜と直接会っ

たことはない。それ故に竜我や師真から話を聞くのみであった。

それでも竜我は正宗を「多くのことを教わりたかった」と皇牙に良く語っていたのを覚えている。そしてその話の中に飛竜のこともあったのだ。

「若君、あそこです」

そこまで話していると鈴那が一軒の家を指し示す。すると皇牙は馬を下り、家の出入り口へと近づく。

「御免！飛竜殿は御在宅でしょうか！」

皇牙が家の前から呼びかける。しばらくすると家の中から赤い短髪の女性が姿を現した。

「どなたか？」

「諷陵太守、獅王皇牙と申します。飛竜殿にお話が合って参りました」

皇牙がそう言うと飛竜は鈴那を見てから溜息を吐く。

「申し訳ないが私はどこにも仕官する気はない。他を当たってほしい」

太守自らが訊ねて来たことと鈴那が傍にいたこともあってそのも目を察した。そしてそれを断ろうとしたのだが……

「しかし、俺は智国大將軍・正宗公の腹心の配下であったあなたに

是非とも話を聞いていただきたいのです」

それを聞いた瞬間、飛竜の足がピタリと止まる。

「何故、あなたが正宗様のことを？」

この世界には飛竜の君主であつた独眼竜正宗を知る者はいないはず。それが飛竜の興味を引いた。

「俺はかつての世界において、五丈国傘下・閃国の国主であつたものです。是非とも飛竜殿に話を聞いていただきたい」

しばし、二人の間に無言の空気が流れる。

「……わかりました、入ってください」

飛竜はそう言うと皇牙たちを家の中に招き入れた。家の中で皇牙は飛竜と相對して座り、皇牙の背後に流琉、六花、鈴那が順番に座っている。

「して、話とは？」

全員が座つたのを確認すると飛竜が話を切り出す。すると皇牙が頭を下げる。

「飛竜殿、どうか俺に力を貸していただきたい」

皇牙は単刀直入に飛竜に訪問の理由を話す。皇牙は五丈の同盟国であつた西羌の裏切りの際にこの世界に来たこと、かつて竜我が国主

となる以前の大五丈の丞相だった骸延も現在皇牙に軍師として仕えていること。

「お断りします」

しかし飛竜の答えはその一言だった。

「……理由をお訊ねしても？」

「私は正宗様：ひいては智の国に忠誠を誓った身。なのに何故あなたに仕えることができましょう？」

それは皇牙が懸念していた通りの言葉だった。飛竜は違う世界に来てなお正宗に忠誠を誓っている。

「しかし、間もなくこの大陸には乱世が到来します。その乱世を生き抜き、天下を統一するためには飛竜殿の力が必要なのです」

皇牙は自分の本心を一切隠すことなく飛竜に話す。これはいずれ漢王朝が倒れると言っていると同義。大つぴらにこんなことを言っているは処罰の対象になるだろう。

「皇牙殿、私は主家である智の国が五丈に併呑されるのを防ぐことができず、あるうことが正宗様の弟君である智王を護れませんでした。そんな女に今更何ができましょう？」

それは皇牙も知っている。竜我率いる五丈は正宗亡き後、力を失った智の国を併呑した。それ自体は戦乱の世ではよくあること。弱者が強者に併呑されるのは寧ろ戦乱の世では当然のことだ。

しかしその後、竜我は後宮に入りびたり、酒と女の日々を送っていた正宗の弟である智王に自害を強要し、亡き者にしたのだ。結果、飛竜は一人銀河を旅する日々を送っていたのだ。

「否、できることはありません。如何な大人物であれ、失敗はするもの。飛竜殿の智勇は竜王より聞き及んでおりました。そしてここにいる馬良や我が軍師、骸延もそれは知っております」

皇牙も一切退く気はない。天下統一と言う野望のためには優れた人材は多くて越したことはない。しかも正宗の腹心であった飛竜ならば尚更だった。

「飛竜殿、あなたが正宗公に忠義を尽くすのは解ります。しかしこの世界には正宗公もいなければ智の国も初めからありません。そしてこの大陸に乱世が訪れる。それを治めるために誰かに仕えることを誰も不忠とはいいません。どうか、俺の天下統一に力をお貸しください」

そう言いながら皇牙は深々と頭を下げる。背後にいた三人も皇牙に習って頭を下げる。

「…………… 皇牙殿、あなたの言いたいことは解った。だが、私はこの世界に来る前に竜王を毒を持って暗殺しようとした女。それでもあなたは私を召し抱えようと考えるのか？」

ここまでの話で多少なりとも皇牙に心を動かされた飛竜。しかし飛竜は皇牙が竜我の傘下であったことを知っている。そして皇牙が西羌と戦ったのは飛竜が竜我を暗殺しようとした後だ。そのことを皇牙は知らず、さらに竜我を暗殺しようとした自分を召し抱えることができるのか……………それが飛竜の疑問だった。

「……………それは飛竜殿の立場を考えれば当然のこと。竜王は飛竜殿にとつて正宗公や智王の仇です。主家の敵討ちを責めることはできません。なにより、恐らく竜王は死んではいないでしょう。あの方は何かとしぶといですから」

最初は驚いた皇牙だがすぐに言葉を返す。皇牙は初めから竜我が死んだとは思っていない。そもそも竜我は五丈最初の南征の折り、正宗の放った銃弾二発を腹部に受けながら生き延びた。その後も騒ぎを起こすごとに昇進するという悪運の強さを発揮している。そんな竜我がいくら毒を受けたとしても死んだとは考えられなかった。

「……………皇牙殿は私の才を買ってくれるのか？」

「無論」

飛竜の問いに皇牙は即答する。それによって飛竜の心は決まった。この異界の地にて皇牙に手を貸すことに……………

「承知した。この飛竜、この世界における主を皇牙殿と定めよう。恐らく、正宗様もそれを望まれるでしょう」

「…ありがとうございます！」

出された結論に皇牙は深々と頭を下げて礼を言った。そしてとりあえずこの日は皇牙たちは先に諷陵に戻り、飛竜はこの家を引き払ってから諷陵に向かうことになった。

それからしばらくして、飛竜は諷陵を訪れ、正式に皇牙配下の将となった。

「ふふ」

「どうした鈴那」

仕官した飛竜は城を案内していた鈴那が不意に笑顔を浮かべたのを不審に思う。

「私が誘っても頑として聞かなかったあなたが若君が行ったら仕官の話を受けた。それがちょっと複雑な心境だっただけです」

「そうね……私も不思議な気分だわ。けど、私は正宗様亡き後誰にも必要とされなくなっていた。宮中では正宗様の寵愛の反動から疎まれ、何もできなかつた。

だから嬉しかったのかもしれない……正宗様のように私のことを必要としてくれる者に出会えたのが……これは皇牙殿が直接会いに来てくれなかつたらわからないことだったわ」

優しく微笑む飛竜。この後、飛竜は獅王軍内でその才をいかんなく発揮することになって行く。

第十二幕 異界にきた忠臣、その名は飛竜（後書き）

名前：比企ひき 弾正だんじょう

性別：男性

詳細：元神聖銀河帝国左將軍にして後に竜我が国主となる五丈の建国者で初代国主。帝国が崩壊して乱世になると同時に挙兵し、瞬間に北天を制圧した一大英傑。

多くの有能な将たちに囲まれ、もともと天下に近い人物とされていた。また、自身の前で乱闘騒ぎを起こした竜我を評価している。

天下統一まで後は南天討伐のみと言ったところまで来ていたが大軍を擁した南征において正宗の策と自身の用兵の拙さから撤退することになる。

撤退後、再び力を蓄えて天下統一を狙っていたが志半ばにして病に倒れる。病床に置いて文官筆頭の配下である呂斎りよさいに正宗に国を譲るという遺言を残す。しかし早まった一人娘の麗羅れいらによって遺書は隠蔽され、呂斎も殺されたことでさらに病状が悪化して七十四歳で死去する。

彼が正宗に国を譲ろうとしたのは自身には跡継ぎである男子が居らず、さらにこれから先乱世が長引くことを嫌ったためであった。

しかし彼の想いも空しくたった一人の娘によって正宗に国を譲ることとはできず、竜我が銀河を統一するまでかなりの年月がかかった。

彼の血筋は後に麗羅が竜我の第二夫人として跡継ぎの二世皇帝を生んだことで天下に残ることになる。

オリキャラ設定（前書き）

蘭と六花や鈴那。さらにこれから出番が多くなる数名のオリキャラの設定です。

基本的に皇牙の呼び名は『若君』や『若』です。

オリキャラ設定

名前：姜維 きょうい

字：伯約 はくやく

真名：蘭 らん

詳細：もともとは天水に住んでいた少女。黄巾賊が現れ始めた頃に少しでも多くの人々を救うために義勇軍を率いて旅をしていた。その後、荊州で黄巾賊と戦っていた際に皇牙に出会い、義勇軍後とその配下となった。

一人称は『私』、髪型は黒のショートカットで瞳の色も黒。年齢は皇牙と流琉の間ぐらい。スタイルはまだペツタンコ。結構気にしている。武勇、知略双方に高い資質を持っており、現在は骸延に師事しており、獅王軍では武官と文官を兼任している。武器は三又の槍『三尖槍』。初めて戦場で見たときの皇牙の美しさに見惚れ、以来皇牙を慕っている。皇牙のことは『若様』と呼ぶ。

名前：凌統 りょうとう

字：公績 こうせき

真名：六花 りっか

詳細：皇牙たちが諷陵に到着する少し前に立ち寄った村で出会った旅の武人。もともとは呉郡の豪族・凌綽の一人娘だった。しかし父の凌綽が江賊討伐の任に就いた際に江賊の頭領に討たれて戦死。その後、凌家にはまだ幼かった彼女しかいなかったために家は没落。彼女はそれ以来武の腕を磨きながら旅を続けていた。

皇牙と出会った際に一目惚れし、皇牙に仕えることを決めた。皇牙のもとでは獅王軍の武官として働いている。何かと流琉や蘭と火花を散らしている。しかし恋愛には奥手でそれでも必死に皇牙を食事

に誘おうとしたりしている。

一人称は『オレ』。武器はトンファー。年齢は皇牙と同年齢の十三歳。腰までの蒼い長髪と蒼い瞳をしており、髪型は三つ編みで髪型のモデルは犬夜叉の蛮骨。口の右端から八重歯が出ている。皇牙のことは『若君』と呼ぶ。

名前：馬良ばりょう

字：季常きじょう

真名：鈴那りんな

詳細：皇牙が諷陵太守になった後、皇牙の噂を聞きつけて妹と共に獅王軍に仕官した軍師の一人で軍略と内政の双方を得意とする。もとは荊州の名士であった馬家の出身で五人姉妹の四女。

常に冷静沈着で口調は普段から敬語を用いる。髪は黒髪で腰辺りまであるロングヘア。眉毛が白く、郷里の人間からは『白眉』と渾名ほんめいされている。

蘭や六花と違い、皇牙に対しては尊敬の念は抱いているが恋愛感情は持っていない。スタイルも抜群で出るとこ出て引つ込むところ引つ込んでいる。

荊州にいた頃に皇牙と同じくこちらの世界に来ていた飛竜と友人になっっていた。

一人称は『私』。皇牙のことは『若君』と呼ぶ。

名前：馬謖ばしやく

字：幼常りゅうじょう

真名：鈴音りんね

詳細：鈴那の妹で馬家五人姉妹の末女。皇牙が諷陵の太守になった

後に姉の鈴那と共に軍師として仕官した。常に冷静な姉とは対照的
でお調子者で調子に乗って失敗することもしばしば。
髪は姉と同じ黒髪ロングだが眉毛の色は姉と違って黒。身長や体型
は流琉と同じくらいで字に引っ掛けて『馬謖幼女』と呼ばれること
もある。口調は『〜であります!』。
一人称は『あたし』。皇牙を呼ぶ時は『若様』と呼ぶ

名前：張任ちやうじん

字：なし

真名：閃華せんか

詳細：皇牙が諷陵に着任したときにちょうど諷陵を訪れていた旅人
もとは蜀の劉璋に仕えていたが劉璋を強く諫めて罷免されて官を失
い、旅をしていた。

諷陵で皇牙が行った『この文に一字加えるか削るかしたら〜』とい
う策に興味を示し、武官として皇牙に仕官した。

武官ではあるが軍略にも精通しており、蘭と並んで智勇の両面で活
躍できるその二。現段階では蘭より上。ただし蘭に比べて軍事は得
意だが内政は苦手。

容姿はショートカットの茶髪に可愛い顔立ち。一人称は『ボク』
のボーイッシュな少女。同じくボーイッシュな六花と仲が良い。流
琉に蘭や六花と同じように皇牙に恋心を抱いている。武器はハルバ
ード。

年齢は六花と同じだがスタイルは六花よりも良い。皇牙のことは『
若』と呼ぶ。

名前：法正ほうせい

字：考直こうちゆう

真名：彩羽さいは

詳細：皇牙の諷陵太守就任後に登用された軍師の一人。皇牙が骸延と共に行った『この文に一字でも加えるか削るかしたら？』の一文を見てこの文が人材発掘のためのものであることを理解して皇牙に興味を持った。

その後、文章を見事に修正して皇牙に謁見。皇牙の能力や人柄に惚れて仕官した。

一人称は『アタシ』、口癖は『あんたバカ？』。かなりキツイ性格をしていて皇牙以外の人間には基本的に敬語を使わない。髪型は赤い髪のツインテール。

もともと自信家で人を小馬鹿にしたような性格だからか直情的な六花とかなり仲が悪い（一応互いの実力を認めてはいる）。

皇牙のことは『若』と呼ぶ。

第十三幕 動き出す蜀の謀臣（前書き）

更新です。

今回は蜀の劉璋陣営の動きが主となります。

あとがきのキャラ列伝も読んでみてください。

感想、非常にお待ちしております。

第十三幕 動き出す蜀の謀臣

飛竜が皇牙の陣営に加わって数ヶ月。皇牙たちは内政と部隊の編成に時間を費やしていた。

それに当たって皇牙はこの世界にも存在する従来の兵である騎馬兵、歩兵、弓兵に加えて新たな兵を生み出した。まずは爆雷兵。皇牙の世界にあつた火薬を使った破壊仕事を担当する兵士である。

この世界ではまだ火薬を用いた武器は存在せず、皇牙の陣営には元の世界での知識を持つている骸延や飛竜がいたことでその製造・使用法を教えることは十分簡単であつた。

更に爆雷兵は潜入以外の破壊工作以外にもある武器を使用して闘うことを皇牙は考えていた。火薬を用いた武器の中でも高い殺傷力、射程距離を持つ『銃』である。

皇牙のいた世界では機械を用いた戦艦やそれに搭載する大砲やガトリングなどが存在した。しかも飛竜が仕えていた正宗はもともと短銃を愛用していたこともあつてか飛竜自身にも銃の知識は豊富でその製造法も覚えていた。

しかし、やはりこちらの世界ではまだ技術的に問題があり、まずは単発式の火縄銃を生産することになった。

次に皇牙の陣営に迎えられた飛竜だが、彼女はその隠密、密使としての技量を活かして正式に隠密部隊を組織することとなった。

彼女自らが隠密行動に適した人材に隠密として鍛え、皇牙の陣営で

の情報収集を担当することとなった。

そうして皇牙たちが領内での整備や部隊の強化に勤しんでいる頃、中央での政権争いは激化の一途を辿っていた。

数日前、漢王朝の帝である霊帝が死去し、その子供である2人の皇太子の跡継ぎ問題である。

皇后である何皇后の子供であり、大將軍・何進の甥にあたる弁皇子と霊帝の側室であった今は亡き王美人の子であり、現在は霊帝の生母・董氏が養育している劉協の2つの派閥である。

しかし何進、及び何皇后の謀略によって董氏が暗殺され、新たな帝として弁皇子が立てられることになったのだが……ここでさらに何進と宦官のトップである十常侍が対立し、中央での争いが終わりを見せることはなかった。

そしてそれと同じ頃、皇牙の治める諷陵から少し離れた地、益州・成都でもある動きが見られていた。

「はあ……」

成都城の廊下を一人の黄緑色の長い髪で左目を隠した妙齡の女性が溜息を吐きながら歩いていった。彼女の名は張松、字は子喬。この成都を含む蜀の地を治める劉璋配下の文官である。

「どうした張松。溜息なぞついて」

そんな張松にさらに一人の男性が声をかける。その男性は茶色い短髪の容姿をしている孟達、字は子敬と言い、張松と同じく劉璋配下の武官で張松とは親友の間柄でもある。

「孟達殿…いやあ、相変わらず劉璋様の無茶な要求ですよ」

「またか……」

張松の言葉に孟達は呆れながら溜息を吐く。そもそも、この地を治める劉璋の父・劉焉は漢王室の血を継ぐ皇族の生まれであり、益州にて漢王朝からの独立を企む有能な人物だった。

しかしその劉焉が病没した後には跡を継いだ劉璋は暗愚であった。父・劉焉が残した武力を用いて自分に従わぬものを排除し、民にも重税を敷いているのだ。皇牙の配下となっていた張任こと、閃華もこのことで劉璋を強く諫めて罷免されたのだ。

それからしばらくして孟達は張松に招かれて張松の部屋に来ていた。

「孟達殿、このままこの益州を劉璋様が治めていても未来はないと…そうは思いませんか？」

不意に、張松はそのようなことを孟達に尋ねる。張松はかねてより

劉璋に不満を抱いていた。こんなことが劉璋の耳に入れば処罰されるのは目に見えている。これを気にせず話せるのは気心知れた友人であり、同じく劉璋に不満を持つ孟達にだからこそ話せることである。

「うむ、それはわしも思っておった。しかしそうは言ってもこの地を治めるに足る人物が他にいるか？張魯は善政を敷いているが凡庸だ。長沙の孫堅ならばわかるが益州までは遠く離れている。仮に張魯を迎え入れてもいずれ訪れる乱世を生き抜ける人材か？」

張松と孟達にもいずれ漢王朝が倒れ、乱世がくることは予想できていた。しかしこの益州で劉璋に対抗できる勢力を持つ張魯は決して暗愚ではないが乱世を乗り切れる人物とは二人には思えなかった。

長沙の太守である孫堅は英傑ではあるが先程、孟達が言った通り長沙と益州は遠く離れている。しかも孫堅の周りには劉表や袁術がいる。

「そのことだが、一人だけ心当たりがある人物がいます」

「む？誰だ？」

張松の言葉に孟達が疑問符を浮かべる。すると張松は一通の手紙を取り出した。

「実は以前、ここを離れた閃華から手紙が来まして。今は諷陵の獅王皇牙殿のもとにいるそうです」

そう言いながら張松は孟達に閃華から送られてきた手紙を見せる。以前、閃華は劉璋の配下だったので張松や孟達とも友人関係だった。

「獅王皇牙殿か……『若獅子』の噂は聞いているが……まだ年若いと聞いているぞ?」

「まあまあ、とりあえず読んでみてください」

張松は皇牙がまだ十三と年若いことから難色を示す孟達に閃華から届いた手紙を見せる。そこには要約するところ書かれていた。

『やつほー、張松元気かな?ボクは元気だよ。ボクは今諷陵で『若獅子』と名高い獅王皇牙様のところに仕官して武官をしてるんだ。皇牙様はボクと同じ年だけど智勇に秀でてるしボクたち臣下の言葉にもしつかり耳を貸してくれる方なんだ。それにすつごくカッコよくて可愛いしね。同僚にも武に秀でてる人や頭のいい人たちが多いしね。張松も劉璋様に愛想尽かしたら皇牙様のところに来ない?凄く働き甲斐があるよ。じゃあまた縁があつたら会おうね。張任より』

…と、閃華からの手紙には書かれていた。それを読んだ孟達は微妙に頭を抱えている。

「……まるで自慢話にしか見えんな。というか閃華は……」

「十中八九、獅王殿に惚れてますよね」

張松が苦笑いしながら孟達に同意する。

「ですけど閃華は人を見る目は確かです。その閃華がここまで絶賛するなら相応の人物だと思いますよ?」

「ふむ……で、どうするんだ?」

どうやら孟達もある程度は納得したらしい。そこで今後のことを張松に尋ねる。

「実はちょうど良いことに先程、劉璋様から獅王殿のところへ使者を送ることになっているんです」

「なに？」

疑問符を浮かべる孟達に張松は事の経緯を説明する。益州の州牧である劉璋は先の黄巾の乱でもその武力をもって益州の黄巾賊を討伐した。

そしてその武力でもって益州での自分の地位を確立したのだが……そこに皇牙が諷陵の太守に就任したので劉璋は皇牙を自分の傘下に入れるために使者を送ることになったのだ。実は最初の張松の溜息はこれが原因でもある。

「そこで今回の使者に私が赴き、獅王殿をこの目で見てきます。そしてそれ如何によって獅王殿に益州を治めていただくための策を用います」

「そうか……しかしどうやってお前が使者になるのだ？」

「そこは考えてあります。任せておいてください」

それから数刻後、張松は劉璋に謁見し、皇牙への使者に自分が行くことを申し出た。

「張松、お主自らが獅王の若造のもとに使者として赴くというのか？」

「御意にございます」

玉座に座る劉璋の前で張松は臣下の礼をとりながら劉璋に自身が使者として諷陵に赴くことを進言していた。

「聞くところによりますれば獅王殿はまだ十三と年若く、ましてやまだ太守になつたばかりで誰かの下に就くのを良しとしない可能性があり、劉璋様に従わぬかもしれませぬ。そうなった場合、劉璋様に従わぬものは排除するが上策と存じます。そこで私自らが赴き、獅王殿の暗殺、ないしは獅王軍の情報を得て参り、劉璋様に勝利を献上したい所存であります」

「おお、そうかそうか……確かにその可能性も考えねばならぬな。見事よ張松、お前の忠義嬉しく思う。獅王の若造への使者の件、お

前に任せよう」

「御意」

劉璋に愛想笑いを向けながら張松は自分の考え通りに事が運んだことを内心でほくそ笑む。劉璋にはああいう風に言ったが当然、自分が使者になることに劉璋が疑問を持たないようにするための虚言である。こうして張松は皇牙への使者として益州を発った。

第十三幕 動き出す蜀の謀臣（後書き）

名前：狼刃ろっは

性別：女性

詳細：比企弾正が興した五丈国四天王の紅一点である女将。智勇に優れ、部下からの信望されており主君である弾正への忠誠心も篤い。後に銀河統一を果たす竜我が弾正に対し、戦死した仲間たちの家族への補償があまりにも低いことを直訴に來た際に発生した乱闘騒ぎで竜我の才能を見出す。その後、弾正が独眼竜正宗たち南天征伐の軍を起こすと先陣を任された。

先陣を務めるに当たって狼刃は弾正に当時一平卒だった竜我をちよつと空きがあつた独立第四 七七師団の師団長に抜擢するするようになり出る。後に南征での敗戦の責を問われて狼刃が処刑されそうになると竜我自身も傷付いた身体をなげうって狼刃を救おうとした。この時は狼刃の処刑に異議を申立て、乱入した竜我と共に処刑されそうになったが同じく五丈国の四天王であつた玄偉げんいの取り成しで一平卒への降格で済んだ。竜我也狼刃を尊敬・信頼し、狼刃自身も竜我に目をかけて彼の手柄を喜び、狼刃の副将であつた蒲生がも曰く「將軍（狼刃）の竜我が手柄を立てたときの眼はまるで我が子を見る母のようだった」らしい。

罰を受けて一平卒に降格した後もその智勇と忠誠心から一平卒にしておくのは五丈国の大きな損失と感じていた弾正と玄偉によって復職したことから弾正も強く狼刃を信頼していた。

弾正の没後、狼刃自身はその忠誠心から殉死（主君の後を追って配下が死ぬこと）を考えた。しかしもともとから互いにいがみ合っていた四天王同士の争いが激化して五丈国が衰退するのが見過ごせず、最期まで五丈国の将であり続けることを決める。

骸羅が帝位につくとそのもつとも信任の篤い將軍となるが竜我が骸羅を討つために挙兵することを見越し、いずれ竜我が天下を取ることを感じて敢えて彼の障害として立ちはだかる道を選ぶ。

そして燃え盛る太陽のすぐ近くにある決戦場・金州海きんすかいで激突。竜我との激しい一騎打ちの末、敗北。最期は竜我に自身と弾正の夢を託して太陽へとその身を投げ、散つて行つた。その最期に竜我は涙を流し続けた。

五丈四天王は仲が悪かったが狼刃と骸羅の二人は互いに相応の友情を感じており、狼刃の死を聞いた骸羅は脇目も振らずに泣き喚いてその死を惜しんだ。

師真からも「五丈の中で最もまともで弾正の跡を継いでもよかった」と評され、竜我は狼刃が自身の敵となると知つたとき「俺は狼刃將軍と共に夢を見たかつた」と涙を流した。死の間際には骸羅に「お前（骸羅）に龍鳳の直垂は似合わない。地獄に来るなら一緒に酒を飲もう」と竜我に遺言を託している。

死後、最期まで五丈国の臣下であり続けた狼刃は弾正の陵墓のよこに忠魂碑を建てられた。また、死んだ後も彼女と竜我の師弟関係は有名で将兵は狼刃を「竜王（竜我）が母と慕つた方」として名が知れている。

なお、本小説においては狼刃は生前何度か閃国を訪れており、幼かつた皇牙に武芸・軍略の手解きをしていたという設定である。

第十四幕 張松訪問（前書き）

ようやく更新です。

穴だらけの駄文ですがよろしくお願ひします。後書きのキャラ列伝も読んでみてください。

感想お待ちしています。

第十四幕 張松訪問

張松が劉璋からの使者として成都を発つてから数十日が経過し、張松はすでに皇牙が治める諷陵に到着。その玉座にて皇牙と対面していた。

「お初にお目にかかります、獅王殿。私は性を張、名を松、字を子喬と申します。この度は我が主、劉璋様の使者として参りました」

張松は深々とお辞儀をしながら皇牙を観察する。

「（なるほど…これが若獅子殿か。外見は若く幼いが、諷陵の街の活気に溢れていることから見てもよい君主なのでしょう。ですが…問題はこれより訪れる乱世を生き抜ける人物かどうか……）」

「遠いところをようこそいらっしやいました。どうか滞在中はゆっくりと疲れを癒してください」

皇牙も張松が自分を観察しているであろうことは気付いていたが特に気にした様子もなく張松に労いの言葉をかける。

「はっ…ありがとうございます。こちらが我が主、劉璋様よりの書状になります。お確かめくださいませ」

張松が取り出した書状を近くの文官に手渡すとその文官はそのまま皇牙に書状を渡した。皇牙は渡された書状を開き中身を確認する。その間に張松は目立たないように玉座の間に控えている将たちを観察する。

玉座の間での配置はまず軍師である骸延と親衛隊長の流琉が皇牙の左右に立っている。次に左右の壁際に飛竜を筆頭に六花、閃華、彩羽、鈴音、鈴那、蘭などの武官、文官が立っている。もちろん、張松は気付いていないが万一に備えて隠密たちが天井裏や玉座の後ろに気配を消して隠れている。

「（なるほど……将の質も申し分なしですね……）」

張松は僅かに見渡しただけでも控える将たちが少なくとも凡将ではないことは解った。張松は武官ではないが先代の劉焉の代から仕え、相応に鍛えられている。最低限の実力を見抜く目は持っていた。

「なるほど……劉璋殿の話は分かりました。近いうちに返事をしたためます。おい、使者殿を部屋にご案内しろ」

「はっ、ありがとうございます」

書状を読み終わった皇牙の言葉に張松は再び頭を下げ、皇牙の配下である文官に案内されるままに玉座の間を出て自分たちが滞在する部屋へと歩いて行った。

「（あの書状を見ても取り乱さない……予測していたのか、もしくは余程沸点が低いのか……）」

張松は歩きながら書状を読み終わった際の皇牙を見てその二つの可能性を考える。張松も劉璋の性格からしてどのような内容かは想像できていた。配下である張松が言うのもなんだがかなり失礼な内容だろう。なので張松が考えたのはまず皇牙が劉璋の書状の内容をあらかじめある程度は予測していたということ。皇牙のもとには以前、劉璋に仕えていた閃華がいることからこれが一番可能性が高いだろ

うと考える。次に考えたのは皇牙の沸点が非常に低いこと。こちらはまだ皇牙という人物をよく知らない張松には確かめようのないことだった。

「（まあ、それも含めて獅王殿を見極めていきましょう）」

そう考えながら張松は案内されるままに自身が滞在する部屋へと入って行った。

一方、玉座の間では先程の書状の件で話し合いが行われていた。

「んで若君、劉璋からの書状にはなんて書いてあったんだ？」

六花は張松が玉座の間から出たことを確認するとすぐに皇牙に書状の内容を尋ねる。すると皇牙は溜息を吐きながら説明する。

「ああ、内容はいたって簡単だ。『大人しく自分の配下になれ』…
…という話だ」

皇牙は呆れ眼で書状に目を通しながらその場にいた将たちに簡単に

説明する。他にも劉璋からの書状には『自分は漢王室の血縁だから』だとかいろいろ書いてあるが結局言ってることは先程皇牙が言った通りの内容なので割愛する。ちなみにわかると思うが劉璋からの書状はかなり上から目線だ。

「はあ！なんだそりゃ！？その劉璋って野郎は何様のつもりだよ！」

この書状の内容に直情的な性格の六花はすぐに激昂した。その六花を宥めながら隣にいる閃華は『やっぱり……』と言った感じで溜息を吐いている。

「落ち着け六花、劉璋の書状の内容は予想済みだ」

「へ？」

皇牙の言葉に六花は呆然とする。さらにその六花に法正こと、彩羽からも声がかけられる。

「あんたバカ？若が劉璋如きの書状の内容を予測できないわけないでしょ？ましてやうちには前に劉璋に仕えてた閃華がいるのよ？」

「あんだとコラー！」

「まあまあ、落ち着いてよ六花。若の目の前だよ？」

「む……」

六花は凄い勢いで彩羽を睨みつける。彩羽のほうは大して気にした様子もなく平然としており、憤る六花を閃華が必死に宥めている。

そして閃華の言葉に我に返った六花は渋々と黙った。

「彩羽も勘弁してやってくれ。六花も俺のことを思ってくれているから怒ってくれたんだ」

皇牙がそう言うと彩羽は「わかっています」と返した。女性の気持ちに疎い皇牙だが、配下の将たちが自分を慕ってくれていることはしっかりと察しているのである。

「で、若様。聞くまでもないと思いますが返答はどうするのでありますか？」

鈴那の横にいる彼女の妹、鈴音こと馬謖が皇牙に尋ねる。といてもここにいる全員が皇牙が胸に抱いている野望……即ち、『天下統一』を知っているために答えは解っているようなものだが……

「当然、断る。劉璋の配下になっても得るものがないからな」

それは当たり前の答えだ。皇牙の野望はいずれ訪れる乱世を勝ち抜き、天下統一を成し遂げること。こんなところで劉璋の下に就くつもりなどない。

「ふむ、しかしそうなると劉璋が黙っていますまい？このような書状を送ってくるような相手ならばすぐにでも軍勢を差し向けてくるのではないですか？」

そう告げたのは鈴音の姉、鈴那である。しかしそれには飛竜が答えた。

「そのことに関しては問題ない。確かに劉璋は益州のほぼ全土を支

配してはいるが奴が行っている悪政は非常に評判が悪い。劉璋に不満を持つ者も多いはず……しかも劉璋の領内は先の黄巾の乱で荒れている上に劉璋自身の悪政で一向に回復していない。護りに徹すれば撃退するのは十分可能だ」

隱密部隊を指揮する飛竜には現在の益州の状況はしつかりと把握できていた。勿論、中には敵に回すと厄介な人物もいるがやはりまだ黄巾の乱の消耗から回復しきっていないかった。対して諷陵は黄巾の乱の傷跡もほとんど癒えており、骸延を初めとする優秀な文官たちのおかげで内政も安定している。流石に真正面からぶつかれば少々分が悪いが防衛線の利点と策を用いれば撃退は可能だと飛竜は考えたのだ。

「……………」

そんな中、閃華だけは顎に手を当てて思案にふけていた。

それからしばらくして、話し合いを終えた閃華は張松が滞在する部屋へと足を運んでいた。理由は先程、会議の場で閃華が考えていたこと。即ち、張松が使者として諷陵にやってきた真意を確かめることである。

「張松、入るよ？」

閃華は部屋の外から声をかけると張松が滞在している部屋に入る。そこには笑顔を浮かべている張松の姿があった。

「これは閃華、お久しぶりですね。何かご用でしょうか？」

笑顔で閃華に尋ねる張松。しかし閃華はしかめっ面で張松を見ている。

「…まったく、ボクがここに来た理由ぐらいわかってるだろう？そういうところは相変わらずだね？」

「ふふ、すみませんね。性分なもので…貴女が来た理由はなぜ私かわざわざ使者として諷陵に来たのか？…と言うことでしょうか？」

「まあ、その通りだね。君は劉璋さんのところでも重臣だ。その君がわざわざ諷陵まで使者として足を運んだのはどうして？」

閃華の言う通り、張松は劉璋の配下の中でも位は比較的高い位置にいる。勿論そう言った人物でも時には使者として敵地に赴くこともあるが、少なくとも今回の劉璋の書状の内容からして張松が赴くほど重要なことではない。

「まさかとは思うけど…もし君が若に危害を加えるためにここに来たのなら…ボクは君を斬る」

閃華は張松を睨みつけながら腰に差した剣に手をかける。返答次第では言葉通りに張松に斬りかかるだろう。それを見た張松は真剣な表情で閃華を見つめる。

「安心してください、私は獅王殿に危害を加えるつもりはありませんよ。私の目的はただ一つ……獅王殿が益州を治めるに相応しい方がどうかを見極めることのみ」

真剣な顔で閃華を見つめる張松。対して閃華は張松の言葉を聞いてしばらく呆然とした後、優しく微笑んだ。

「それを聞いて安心したよ。君も劉璋さんへの不満が溜まってるんだね？」

「当たり前でしょう？先代の劉焉様ならいざ知らず、劉璋様は民に圧政を敷く暗君。劉璋様の傘下にいる将たちも心ある者たちは皆、不満を抱いていますよ……故に見極めたいのです。若獅子と呼ばれる獅王殿がどれほどの人物なのかを……」

張松の呟きに閃華は、ただ満足げに笑っていた。

第十四幕 張松訪問（後書き）

名前：骸羅がいら

性別：男

詳細：弾正の起こした五丈国・四天王の一人にして四天王随一の豪傑。骸延の兄であり、三兄弟の長兄。南蛮の血を引いており、その姿は虎の獣人。身の丈は二mを優に超え、城の柱を引っこ抜くなどの怪力無双を誇り、若き日の竜我は手も足も出なかった。

武勇には秀でているものの、三兄弟末弟の骸延とは違って浅慮で粗暴。その身には強大な野望を秘めており、常に自分が上に立つ機会を窺っていた。

骸羅は知略に疎い面から同じ四天王の狼刃や玄偉げんいとは違って弾正には重用されなかった。しかし弾正が病没するとその一人娘である麗羅姫が弾正の実権を握るために骸羅に協力を要請し、結果的に麗羅姫と骸羅の手によって刃向う者は全て斬られ、骸羅は麗羅姫のもとに五丈全軍の指揮権を得ることになる。

だが骸羅の野望はこれで終わらず、末弟・骸延の策によって麗羅姫は命を狙われ、五丈を脱出した。そして実質的に五丈の支配者になった骸羅は遷都を強行し、ついには国名を『大五丈』と変えて銀河皇帝・聖天大帝を名乗る。ちなみに骸羅が皇帝の位に就けたのは全て末弟・骸延の知略があったからである。

骸羅が皇帝の位に就くと南京楼の太守であった竜我は『偽帝討伐』の軍を起こす。僅か十万の竜我軍に対して次兄・骸山がいざん、末弟・骸延、元四天王の狼刃を擁し、八百万の軍勢を持つ骸羅だったが竜我軍の武勇と知略によって連敗を喫し、追いつめられる。さらに骸羅は竜我の軍師・大覚屋師真の離間の計に嵌って知恵袋である骸延の妻子を殺害し、骸延を幽閉してしまう。結局、狼刃も激戦の末に敗れた

ために骸羅の敗北は決定的になり、ついには竜我との城内にて竜我と一騎討ちを行う。かつては竜我を歯牙にもかけない強さを誇った骸羅だが、竜我は常に最前線で腕を磨いており、対して骸羅は皇帝となつて贅沢な暮らしをしているうちに体力が衰えていた。怪力だけは健在だったが竜我はもはやそれだけでどうにかなる相手ではなく、手傷を負わされて逃亡。そして逃亡した先で元四天王の一人である玄偉に斬られて討ち死にした。

粗暴な人物ではあるものの狼刃には篤い友情を感じており、彼女の死には人目も憚らずに喚き散らしながら涙を流した。一度は帝位に就いたものの他者を見下す傾向があつたために数では圧倒的に勝る竜我軍に敗北した。

骸羅が帝位に就いてからの政治は悪政を極め、豪華な宮殿を作るために民から税を絞り、農村から人夫や兵を徴兵した。さらには財政難を解消するために亡き主君である弾正の陵墓を掘り返して共に埋葬されていた財宝の全てを奪うなどの暴挙に出た。さらに弾正の墓をあばくのを諫めようとした臣下の頭を握りつぶして殺害し、その死体を杵と臼で碎くなど残虐な行いも平然と行った。

本小説の主人公である皇牙の父はこの骸羅が五丈を乗っ取る際の混乱に巻き込まれて死亡している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2791n/>

真恋姫無双～若獅子演義～

2011年8月16日12時19分発行